

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

高三納遺跡

平成3年度農村総合整備モデル事業(高三納地区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

1992・3

宮崎県・西都市教育委員会

序

西都市教育委員会は、西都市耕地課の委託を受けて、農村総合整備事業（高三納地区）に伴う発掘調査を実施いたしました。本書はその発掘調査結果の報告であります。

調査の結果、縄文時代早期と考察される集石遺構をはじめとして縄文時代及び弥生時代の土器・石器等の遺物、さらには中世から近代の陶器・染付等の遺物が検出され、多大な成果をあげることが出来ました。よって、これらのことから高三納地区においても古来より先人がこの地に住み生活していたことが判明しました。

この報告書が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されると共に、埋蔵文化財に対する理解と認識が得られれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってはご協力いただいた市耕地課をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成4年3月31日

西都市教育委員会

教育長 平野 平

例　　言

1. 本書は、平成3年度農村総合整備モデル事業（高三納地区）に伴い、平成3年度に実施した高三納遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、西都市耕地課の依頼を受けて、西都市教育委員会が実施した。
3. 調査組織は、次のとおりである。

調査主体　西都市教育委員会

教　育　長　平　野　　平

社会教育課長　清　郁　男

同文化財係長　伊　達　博　敏

調査員　日高正晴（西都原古墳研究所長）

蓑方政幾（上事）

調査作業員　篠原時江・黒木トシ子・長谷川クミエ・藤原秋子

黒川種秋

整理作業員　野田良子

4. 遺物の実測・トレース・図面の作成は野田と蓑方が行った。
5. 本書第V章まとめは日高が、その他は蓑方が執筆した。
6. 本書に示す方位は磁北である。
7. 上肩・土器の色調は農林省水産技術会議事務局監修の標準土色帖による。
8. 本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保管し、展示される。

本文目次

I. 調査に至る経緯	2
II. 遺跡の位置と歴史的環境	3
III. 調査の概要	5
IV. 遺構と遺物	9
1. 繩文時代の遺構と遺物	9
2. 弥生時代の遺構と遺物	12
3. 古墳時代以降の遺構と遺物	12
V. まとめ	31

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 土層図	6
第3図 遺構分布図	7~8
第4図 1号集石遺構・溝状の土坑実測図	10
第5図 2号集石遺構実測図	11
第6図 2号溝状遺構・配石状遺構実測図	16
第7図 出土遺物実測図（縄文土器・弥生土器）	22
第8図 出土遺物実測図（弥生土器・土師器）	23
第9図 出土遺物実測図（土師器）	24
第10図 出土遺物実測図（土師器・須恵器）	25
第11図 出土遺物実測図（白磁・青磁・磁器・染付）	26
第12図 出土遺物実測図（染付・陶器）	27
第13図 出土遺物実測図（陶器・瓦）	28
第14図 出土遺物実測図（瓦）	29
第15図 出土遺物実測図（石器）	30

表 目 次

表 1	弥生土器觀察表	13
表 2	土師器觀察表	20~21

図 版 目 次

図版 1	高三納遺跡遠景・調査地土層・1号集石遺構検出状況	33
図版 2	2号集石遺構・溝状の土坑検出状況	34
図版 3	1号・2号・6号・7号溝状遺構・配石状遺構検出状況	35
図版 4	8号溝状遺構・1号方形土坑・3号円形土坑等検出状況	36
図版 5	出土 遺 物	37
図版 6	出土 遺 物	38
図版 7	出土 遺 物	39
図版 8	出土 遺 物	40
図版 9	出土 遺 物	41
図版10	出土 遺 物	42



遺跡番号	遺跡名
1001	西都原古墳群
1002	清水西原古墳群
1003	上ノ原遺跡
1004	寺山遺跡
1005	清水遺跡
1010	上宮遺跡
1011	上宮古墳
1012	上宮城跡
1013	三宅城跡
1014	諏訪遺跡

遺跡番号	遺跡名
1026	原口遺跡
3001	松本塚古墳
3002	松本遺跡
3003	松本原遺跡
3004	長野原遺跡
3005	永野遺跡
3006	鶴目原遺跡
3007	長谷場遺跡
3008	三納古墳群
3009	法連寺遺跡

遺跡番号	遺跡名
3010	平城遺跡
3011	三納城跡
3019	高三納遺跡
3020	平郡遺跡
3021	平郡城跡
4002	三財古墳群
4019	前原遺跡
4020	加勢遺跡
4021	久米田遺跡
4022	尾能遺跡

第1図 遺跡位置図

I. 調査に至る経緯

西都市の西部に位置する三財・三納・都於郡地区は、昭和45年度には綾川総合開発事業が実施され、また、県営圃場整備事業等も行われ、水田・畑地帯の整備が進み農業形態が整いつつある。しかし、市の中心部から離れていることもある、生活・生産環境面で整備が遅れている。このようなことから、三財・三納・都於郡地区の三地域が農村総合整備モデル事業に選定され、それに伴い様々な事業が実施されている。

そのなかで、平成3年度には高三納地区（三納）集落道工事及び側溝工事を実施することとなり、市耕地課より相談があった。しかし、同地域が周知の埋蔵文化財包蔵地にもなっていることから市耕地課と埋蔵文化財の保護について協議を重ねた。

協議の結果、市耕地課としては工事計画の変更が困難であるため、事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、市耕地課の依頼を受けて西都市教育委員会が主体となり、平成3年10月23日に着手し、同年12月10日に終了した。

II. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市は、宮崎県のほぼ中央部に位置する内陸都市で、地形としては西方に九州山地を背負った形容を表し、その九州山地から岬様に南東へ、東へと幾条にも台地が延びている。また、市街地を中心とする平野部の東端を南流する一ツ瀬川及び支流の三財川・三納川等が沖積地を潤し、豊かな農地が形成されている。

西都市の遺跡は、この幾条にも延びた台地上を中心に分布している。時代的には、表採ではあるものの鐵器・櫛現・丸山・大口川・宝財原等でナイフ形石器・尖頭器・細石核が確認されており、旧石器時代まで遡ることができる。

また、縄文時代の遺跡は、鴨目原遺跡・丸山遺跡・串木第2遺跡・中原遺跡・銀鏡遺跡等で確認されているが、串木第2遺跡・中原遺跡からは早期の土器とともに集石遺構が検出され、鴨目原遺跡からは竪穴式の方形住居址等が検出されている。

弥生時代の遺跡は、寺原第1遺跡・寺原第4遺跡・下尾筋遺跡・串木第2遺跡等で確認されている。寺原第1遺跡・寺原第4遺跡では弥生終末前後の張出しを有する変形住居址が検出され、下尾筋遺跡では弥生中期の口縁部に円形浮文を有する大型壺及びV字溝等が検出されている。

古墳時代については「古墳のまち西都」と言われているように先史時代に比して急激に文化が進み、畿内系統の前方後円墳を主とする古墳群や独立墳が各地に築造されるようになる。特別史跡西都原古墳群をはじめ三納古墳群・三財古墳群・茶臼原古墳群・清水西原古墳群及び独立墳の現存650基程の高塚墳、一ツ瀬川以北を中心に方格矩久文鏡・環通大刀双龍文環頭柄頭が検出された千畳横穴墓群や上江・野竹等の各横穴墓群、一ツ瀬川以南の西都原台地・六野原台地等で確認されている地下式墳がある。中でも全国的に周知されている西都原古墳群は西都原台地上を中心に、柄鏡式を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成されている。さらに、西都原台地の中央部には、特別史跡309基には含まれない男狹穗塚と女狹穗塚古墳（明治28年12月4日宮内庁陵墓参考地として指定）2基の巨大古墳が威容を誇っている。その他遺跡として松本遺跡・酒元遺跡及び昨年度実施した遺跡所在確認調査で確認された童子丸遺跡等がある。

古墳時代以降の遺跡は、奈良時代西都原台地南側の中間微高地に日向国府が置かれ、また、同台地に日向国分寺同尼寺等が保存されていることから更に高度な文化がもたらされ、この地域が古代日向国の中心的な役割を果たしてきた。さらに、寺崎遺跡・上妻遺跡等から布目瓦やこれに関連した遺構が検出され、また、一説によると同地域が日向国府の推定地にもな

っていることから非常に興味深い。

そして、平安時代には全国的な庄园制社会の中に編成され、さらに、南北時代の初頭には足利尊氏から都於郡を贈与され本地に下向した伊東氏一族とその子孫によって日向経略が進められていった。その中心となったのは都於郡城で、日向地内に48城を従えるが、元亀3年（1572）真幸攻めの失敗頃より運命も尽き果て、天正5年（1577）都於郡落城となり、ここに200数十年にも及ぶ伊東氏の支配勢力も終結する。伊東氏に代わって日向を支配するのが島津氏で、東米良地域をのぞいて統治された。

以下江戸時代当初には上総北・下総北が延岡藩に属されるが、中期になると天領地として編成される。その他都於郡・三納・三財・妻は佐土原藩に属していたが、明治4年の廃藩置県の令によって佐土原藩は終わる。明治・大正時代には大きな変動は見受けられないが、昭和30年（1955）明治22年施行の市町村制による妻町と上総北村が合併して西都町となり、昭和33年三納村と都於郡とが西都町と合併し同年11月市制施行、さらに、昭和37年三財村と東米良とが第3次合併し現西都市となるなどめまぐるしい変遷・変革を見せた。

ところで、高三納遺跡は九州山地が南東に向かって細長く延びた永野原・清水台地と平郡台地とに挟まれた孤立台地上に位置し、周囲には三納平野が広がり、北側眼下には三納川が東流している。市街地の南西kmにあたる。平郡台地には三納古墳群及び三財古墳群が点在し、永野原・清水台地には清水西原古墳群及び三納古墳群が点在している。この永野原台地の古墳群は通称「百塚原」と呼ばれ、38基の古墳が点在しているが、大正時代には金銅製の馬具類が発見され、現在国宝に指定されている。さらに、清水台地の南西低地、同遺跡の北東0.9kmには100m超級の国指定「松本塚古墳」が泰然とその姿を横たえている。この松本塚古墳についても、昭和61～63年度にかけて西都市教育委員会において県営圃場整備事業に伴う発掘調査を実施し、多量の須恵器及び土師質円筒埴輪をはじめ形象埴輪等の貴重な資料を得ている。

調査地は、畑作地帯で、昭和60年度実施した遺跡詳細分布調査において弥生土器・土師器・須恵器等を採取し、さらに、現時点においても多量の土器片等が散布していることから、遺構の存在が推定された。

III. 調査の概要

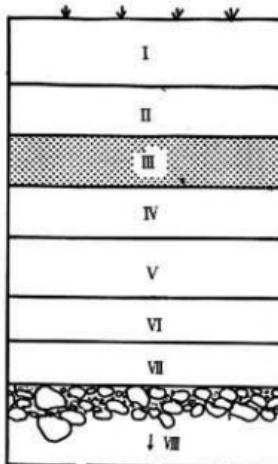
調査は道路及び拡幅部分について実施したが、道路のほぼ中央部を道路に沿って水道管が貫通しており、すでに、幅1m程については攪乱を受けていた。よって、その部分を除いた対象地について発掘調査を実施した。

また、調査範囲が道路改良に伴うもので広範囲のため、都合上南側をA区・北側をB区・西側をC区とした。そして、順次A区から発掘調査を実施した。

なお、当遺跡の基本土層(第2図)は掘削された道路斜面で確認されるが、第I層が表土(耕作土)・第II層が黒色土・第III層がアカホヤ火山灰層・第IV層が黒褐色ローム・第V層が褐色ローム・第VI層が明褐色ローム・第VII層が赤褐色ローム・第VIII層がジャリ混じりの疊層となっているが、調査区においてはアカホヤ火山灰層は残存しておらず、通常のアカホヤ火山灰層による発掘調査は実施できなかった。しかし、第V層の褐色ローム層が残存しており、この層によって遺構等の確認を行った。

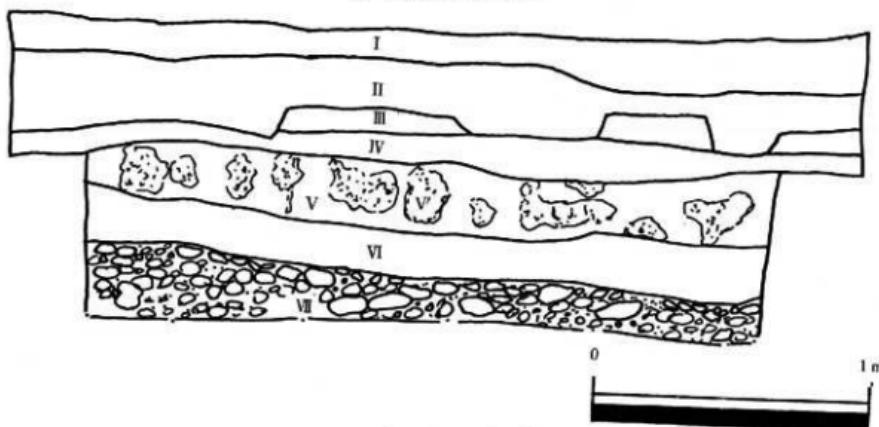
結果、遺構としてA区及びB区から縄文時代早期と考察される集石遺構2基と中・近世と考察される溝状遺構等が検出され、遺物としては二重口縁を有する弥生時代中期から後期の壺をはじめ1点ではあるが山形押型文土器や粒子の荒い土師器及び陶器・染付等が多量に出土した。

これらの詳細については後述するとして、当地域においても古来より生活が営まれていたや遺構として深型の集石遺構が検出されたこと等は大きな成果であった。



- I～表土（耕作土）
II～黒色土
III～アカホヤ火山灰層
IV～黒褐色ローム
V～褐色ローム
VI～明褐色ローム
VII～赤褐色ローム
VII'～ジャリ混りの疊層

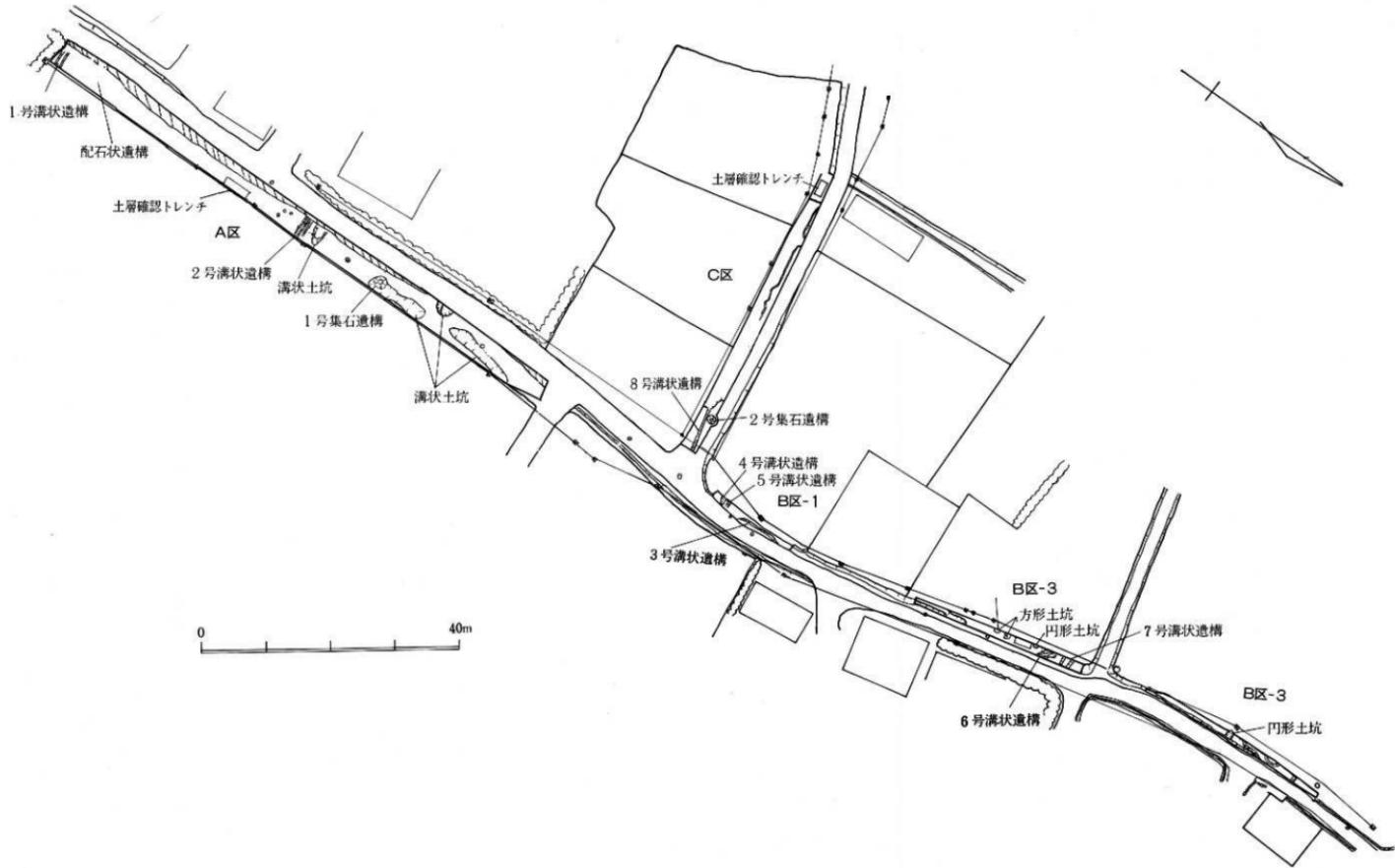
高三納遺跡基本土層図



調査区土層図（A区）

- | | |
|-------------|------------------|
| I～表土（耕作土） | V～褐色ローム |
| II～黒褐色土（擾乱） | V'～褐色土（粒子があらく硬質） |
| III～暗褐色土 | VI～赤褐色ローム |
| IV～黒褐色ローム | VII～ジャリ混り疊層 |

第2図 土 層 図



第3図 遺構分布図

IV. 遺構と遺物

1. 繩文時代の遺構と遺物

(1) 遺構 (第4・5図)

繩文時代の遺構はA区及びC区で集石遺構2基が検出されている。どちらも底面に大きな礫を配した深型の集石遺構である。

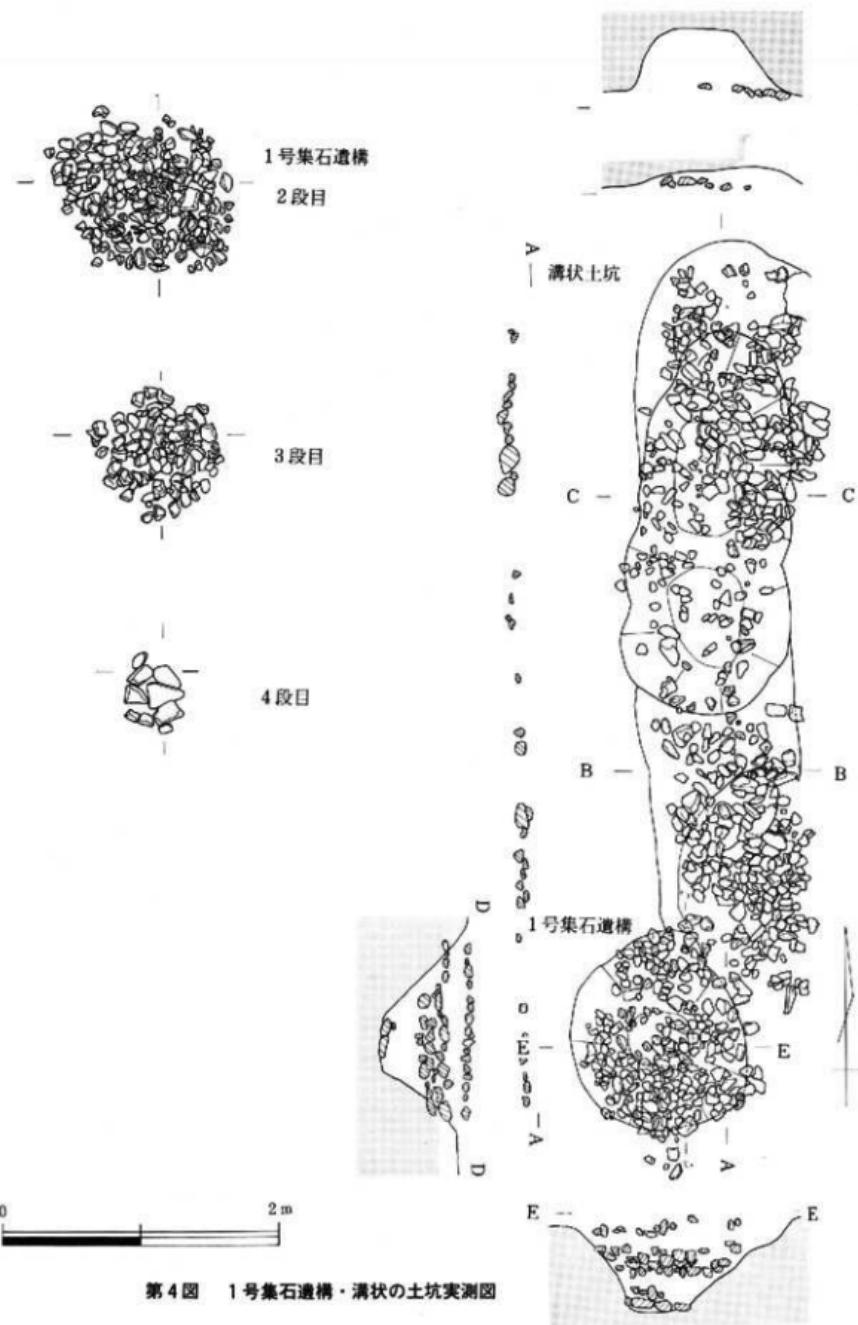
1号集石遺構はA区中央部から検出されたもので、径1.5m・深さ0.6mを計り、断面U字状の掘込みを有するタイプのものである。底面には長さ30cm前後の礫5個を配し、上部には10~20cmの礫が無規則に集積されている。ほとんどが角礫で構成されている。遺物は上面で土師器が出土している以外は確認できないが、出土状態から混入と考察される。

2号集石遺構はC区の東側から検出されたもので、径1.04m・深さ0.42mを計り、1号集石遺構同様断面U字状の掘込み及び底面には長さ30cm前後の礫を配するタイプのものである。また、上部には10~20cmの礫が無規則に集積されている。遺物は出土していない。

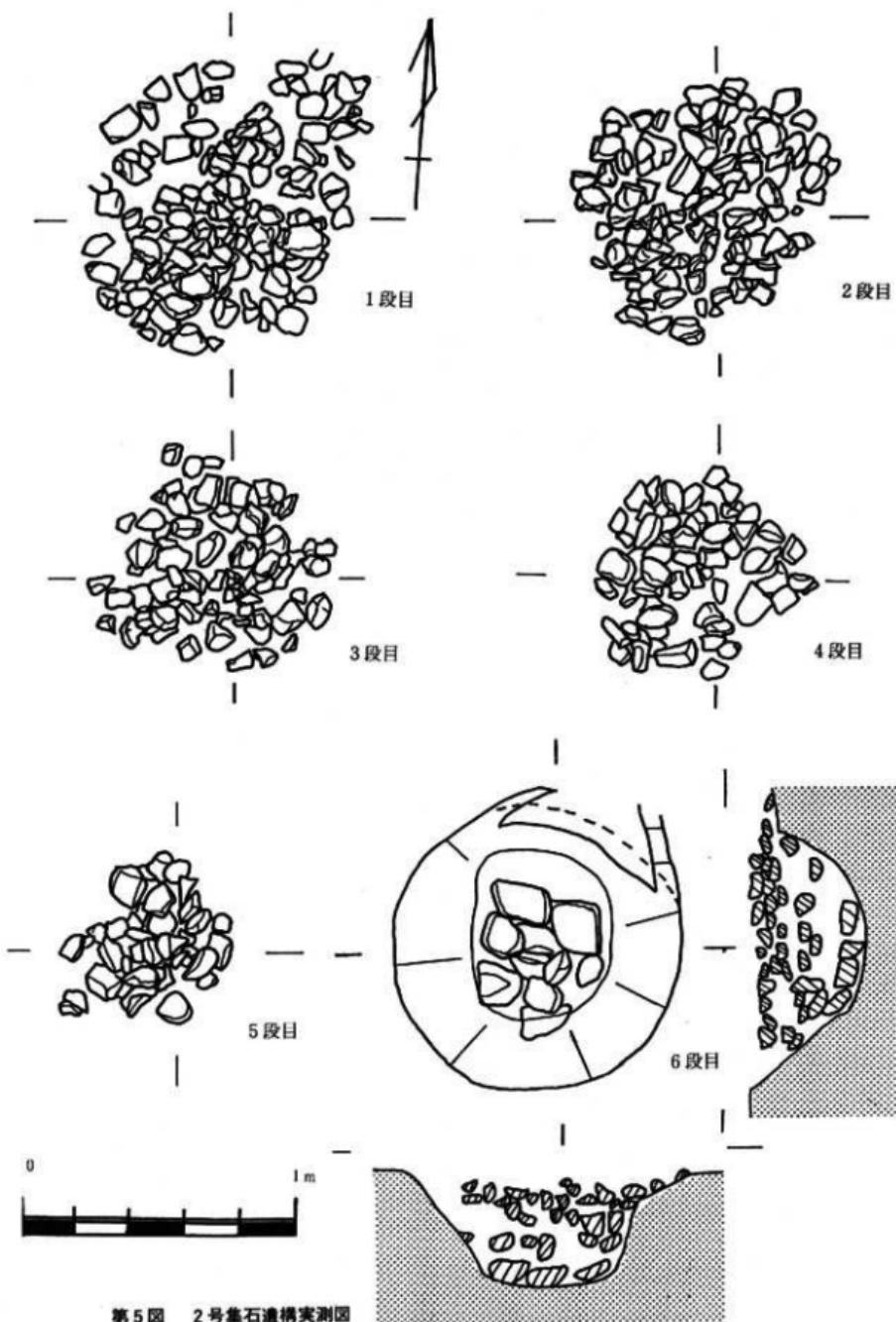
(2) 遺物 (第7図)

縄文土器 (第7図1)

縄文土器はわずか1点であるが、B区-2から出土している。1は大型の山形押型文を縦位に施した胴部破片で、色調は赤褐色、胎土はあらく3~5mm前後の粒子を含む。



第4図 1号集石遺構・溝状の土坑実測図



第5図 2号集石造構実測図

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺 物

弥生時代の遺構は検出されなかったが、A～C区から多くの弥生土器が出土しており、また、周辺地域の畠地等に多量の土器等の遺物が散布しており、大集落跡等の遺構の存在が推定される。

(2) 遺 構 (第7・8図)

弥生土器 (第7図2～第8図19)

遺物総数の5%あたる80点出土しているが、ほとんどが小片で反転復元できうるものはない。器種としては壺型土器が多いが、壺型土器及び高杯等も含まれる。

2・3は口縁部に刻目突帯を有する、いわゆる下城式系の壺型土器である。2は口縁下部、3は口縁上部に突帯を施している。4は幅広い突帯を有する壺型土器、5は口縁部が「く」字状に大きく外反し、口縁下部に刻目突帯を有する壺型土器である。6・7は口縁部が大きく外反した壺型土器、8・9は口縁部が緩やかに外反した壺型土器の口縁部である。10は大型の壺型土器に施してあったと思われる突帯である。11は口縁部が外反し、口唇部が外側に拡張された、いわゆる鋸先状を呈している壺型土器の口縁部で、頸部には2条の突帯が施され、器厚が厚い。12は口縁部が大きく外反した壺型土器の口縁部である。13～15は頸部に幾つかの突帯を施す壺型土器の頸部である。16・17は丁寧に板状施文具によってハケ目調整された薄手の壺型土器の頸部で、同一個体と思われる。18・19は壺型土器の底部で、平底を呈している。

なお、これらの詳細については観察表を掲載したので、参考にしていただきたい。

3. 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 遺 構 (第3・4・6図)

古墳時代以降の遺構については比較的新しい時代のものが多く、近世から現代のものが含まれている。主なものとしてA区から溝状の土坑4基・溝状遺構2条・配石状遺構1ヶ所、B区-1から柱穴6個・溝状遺構1条、B区-2から溝状遺構3条・円形土坑1基、B区-3から溝状遺構1条・溝状の土坑1基・楕円形の土坑1基、C区から溝状遺構1条・溝状の

表1 弥生土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第7図	2	甕	口縁部	口縁部に刻目突帯 ヨコナデ	ヨコナデ	良好	灰褐色 7.5YR4/2	にぶい褐色 7.5YR6/4	2mm前後の 粒子含む	B区-1 口唇部平坦
"	3	"	"	口縁部に刻目突帯 ヨコナデ	ヨコナデ	"	にぶい黃褐色 10YR7/3	褐色 7.5YR6/6	" 白雲母混入	B区-1 口唇部平坦
"	4	"	胴部	台形状の突帯 ヨコナデ	ヨコハケ	"	灰白色 7.5YR8/2	灰白色 7.5YR8/2	2mm前後の 砂粒を多量 に含む	C区
"	5	"	口縁部	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコハケ	"	にぶい黃褐色 10YR6/3	にぶい黃褐色 10YR7/2	2mm前後の 砂粒を含む	B区-1 口唇部窪む
"	6	"	"	ヨコナデ	ヨコナデ	"	褐色 2.5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR7/3	"	B区-1 口唇部丸い
"	7	"	"	"	"	"	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐色 7.5YR6/6	"	A区 口唇部平坦
"	8	"	"	"	"	"	浅黃褐色 10YR8/3	浅黃褐色 7.5YR8/4	"	B区-2 口唇部平坦
"	9	"	"	"	"	"	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	3mm前後の 砂粒を含む	B区-1 口唇部平坦
"	10	"	胴部	台形状の大型突帯		"	にぶい黃褐色 10YR7/3	褐灰色 7.5YR6/1	2mm前後の 粒子を含む	B区-1
"	11	"	口縁部	2条の次帯 ヨコナデ タテハケ	ヨコナデ ヨコハケ	"	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい褐色 7.5YR5/3	" 白雲母混入	B区-1 縫先状口縁
"	12	壺	"	ヨコナデ	ヨコナデ	"	にぶい黃褐色 10YR7/3	にぶい黃褐色 10YR6/3	2mm前後の 砂粒を含む	B区-1 口唇部平坦
"	13	"	頸部	5条の突帯 ヨコナデ		"	浅黃褐色 7.5YR8/3	褐灰色 7.5YR5/1	"	"
"	14	"	"	2条の突帯 ヨコナデ		"	にぶい黃褐色 10YR7/3	褐黄色 2.5YR7/2	"	"
"	15	"	"	3条の突帯 ヨコナデ		"	褐色 7.5YR4/4	褐色 7.5YR4/6	白雲母混入	"
第8図	16	"	頸部	タテハケ	ヨコナデ ヨコハケ	"	にぶい褐色 7.5YR6/3	浅黃褐色 7.5YR8/6	2mm前後の 砂粒を含む	
"	17	"	"	"	"	"	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR5/4	"	16と同一個体
"	18	"	底部	ヨコナデ	ヨコナデ	"	明黄褐色 10YR7/6	にぶい黃褐色 10YR7/4	4mm前後の 砂粒を含む	
"	19	"	"	"	"	"	褐色 7.5YR7/6	褐灰色 10YR5/1	A区 木の茎痕を残す	

遺構 1 基等が検出されている。これら遺構のなかで A 区及び C 区の溝状の土坑（第 4 図）については、地元の人たちの話によると、昭和時代に石塚といわれる石を積み上げた塚があり、その石塚には石の他に陶器及び瓦等が含まれていたが、耕作に支障をきたすことから土坑を掘りすべて埋めた跡であるということから、新しい時代の遺構であることが確認された。また、B 区の溝状の土坑については確認はとれなかったが、共伴遺物及び出土状態から同種の土坑と考察される。実際共伴遺物からも弥生土器をはじめ打製石斧・土師器そして多量の染付・陶器に加え現代の瓦等も多量に出土していることからこれらのことことが裏付けられる。よって、この溝状の土坑については最も新しい時代のもので、詳細についての考察は省略させていただきたい。

溝状遺構（第 3・6 図）

A 区から 2 条（1・2 号溝状遺構）、B 区 1～3 にかけて南北に 1 条（3 号溝状遺構）、B 区 1 から 2 条（4・5 号溝状遺構）、B 区 2 から 2 条（6・7 号溝状遺構）、C 区から 1 条（8 号溝状遺構）の計 8 条が検出されている。

1 号溝状遺構は A 区南端部、2 号溝状遺構は A 区中央部から検出されたもので、底面に大小様々な大きさの石を配している。1 号溝状遺構は幅 0.7m・確認した長さ 1.8m・深さ約 0.2m、2 号溝状遺構は幅 0.8m・確認した長さ 2.0m・深さ 0.2m、断面 U 字状を呈している。いずれも東西方向を向いている。共伴遺物は陶器及び磁器等が出土している。

3 号溝状遺構は B 区 1 から B 区 3 にかけて検出されたもので、また、西側壁面のみしか検出されていないが、地元のお年寄りの方が小さい頃にあった排水用の溝の跡ということである。現道路に沿って確認されている。

4 号及び 5 号溝状遺構は B 区 1 南部から検出されたもので、隣接している。4 号溝状遺構は幅 0.5m・確認した長さ 0.9m・深さ 0.15m、5 号溝状遺構は幅 0.7～1.2m・確認した長さ 1.2m・深さ 0.2m、断面 U 字状を呈している。共伴遺物は 4 号溝状遺構から弥生土器、5 号溝状遺構から弥生土器や土師器が出土しているが、唯一 4 号溝状遺構は弥生土器のみを出土する遺構で、同時代の遺構の可能性が高い。

6 号及び 7 号溝状遺構は B 区 2 北部から検出されたもので、隣接している。6 号溝状遺構は幅 1.6m・確認した長さ 1.8m・深さ 0.1m、7 号溝状遺構は幅 1.7m・確認した長さ 1.4m・深さ 0.35m、断面 U 字状を呈している。共伴遺物は 6 号溝状遺構から土師器壺や高环が、7 号溝状遺構から高台付壺や壺の小片が出土している。

8 号溝状遺構は C 区東部から検出されたもので、幅 0.4m・確認した長さ 7.2m・深さ 0.03～0.08m、断面 U 字状を呈した小さい溝状遺構である。共伴遺物は土師器・陶器等が出土し

ている。

これらの溝状遺構のなかで、1号・2号・5～8号溝状遺構については、いくつかの寺があったと言い伝えられていることから、同跡に関連した遺構と考察される。

配石状遺構（第6図）

A区南部から検出されたもので、大小の石を組合せて配している。しかし、現存しているのは最大幅1.0m・長さ約5.0mの三角形状で、何の遺構であるかは判断がつきにくいが、前述した寺関係の遺構と考察される。

土 坑（第3図）

土坑は円形土坑3基・方形土坑2基及び、前述した溝状の土坑が検出されている。

円形土坑はB区-2から2基、B区-3から1基の計3基で、1号円形土坑は径0.8m深さ0.27m、2号円形土坑は径1.1m・深さ0.05m、3号円形土坑は径0.8m深さ0.2mを計る。3号円形土坑は楕円形状で、土坑内には無規則に礫が集積されていた。長軸不明・短軸0.92m・深さ0.16mを計る。なお、2号円形土坑内には多量の灰白色粘質土が混入していた。方形土坑はB区-2で2基検出されているが、いずれも一部分が調査対象外に延びている。1号方形土坑は一辺0.8m・深さ0.4m、2号方形土坑は一辺0.8m・深さ0.23mを計る。

柱 穴（第3図）

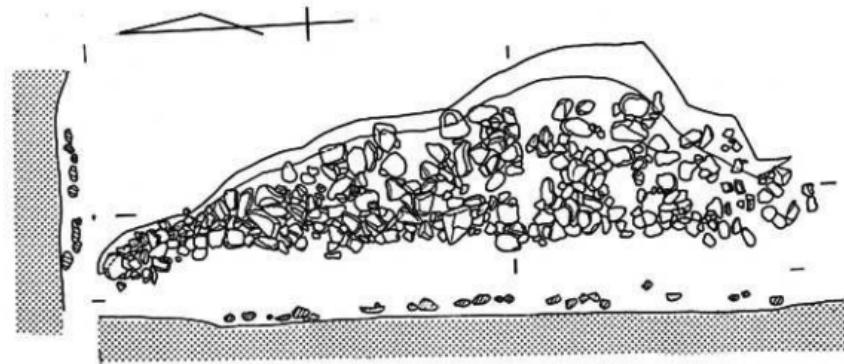
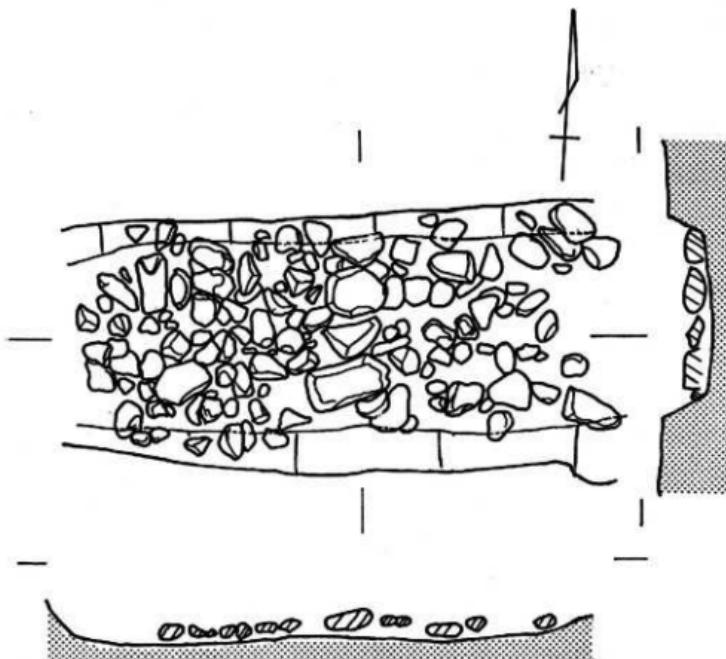
柱穴はA区から3個、B区-1から6個、B区-2から1個の計10個検出されている。径0.2m～0.4m、深さ0.1～0.38mを計る。すべて円形柱穴である。

（2）遺 物（第8～15図）

土師器（第8図20～第10図50）

全体の25%にあたる350点が出土している。器形は壺及び甌型土器が多いが、大きく胎土のあらい厚手の土器（26～36）と胎土のこまかい薄手の整美な土器（37～50）に分類され、前者の土器は甌型土器、後者は壺がほとんどを占める。

20～25は脚部及び壺部がわずかに残存している高壺で、20は受部がわずかと、脚柱がわずかに残存している。受部は丸みをもちらながら立ち上り、脚柱はラッパ状に広がっている。丁寧なヘラ磨きが施され、胎土は微砂粒を含み、にぶい橙色を呈している。21は丹塗りの高壺の脚部で、脚部は外反ぎみに広がっている。内外面丁寧なヘラ磨きが施され、胎土は微砂粒を含み、明赤褐色を呈している。22は脚部で、脚部は内湾して広がるものと思われる。ヘラ磨きが施され、胎土は微砂粒を含み、にぶい赤褐色を呈している。23は脚部で、脚部は内湾しながら広がるものと思われる。ナデ調整で、胎土は微砂粒を含み、にぶい橙色を呈してい



第6図 2号溝状遺構・配石状遺構実測図

る。24は脚柱がわずかに残存しているもので、脚柱はエンタシス状になると思われる。丁寧なヘラ磨きが施され、胎土は微砂粒を含み、にぶい橙色を呈している。25は小型高环の脚部で、脚部は大きく内湾して広がっている。ヘラ磨きが施され、胎土は微砂粒を含み、灰黄色を呈している。

26~28は口縁部が外反し、口唇部が尖った壺型土器の口縁部で、29は口縁部が外反し、口唇部が平坦な広口壺の口縁部である。30は口縁部が外反した壺型土器の頸部、31は胴部に突帯を有する壺型土器?の胴部である。32は丸底の底部で、叩目を有する。33・34は壺型土器の底部で平底である。35はコップ型土器の底部、36は丸底の底部である。37~50は坏であるが、小さいものから大きいもの、底部がはっきりしているものや丸みをおびて境目がはっきりしないもの及び段をもつもの、高台付のもの等バラエティーに富んでいる。底部はすべてヘラ切り底である。これらは、時期的・時代的な変化であると考察される。

各部の計測・詳細については観察表を付したので、ここでは省略する。

須恵器（第10図51~56）

11点出土している。51~54は胴部小片であり特定できないが、壺及び壺型土器等の破片と思われる。51は外面に格子目叩きを施し、内面はナデ調整、胎土はこまかく微砂粒を含み、灰色を呈している。52は外面に平行叩き、内面に同心円の青海波文の叩きを施し、胎土はこまかく微砂粒を含み、灰色を呈している。53は外面小さな格子目叩き、内面に同心円の青海波文の叩きを施し、胎土はこまかく微砂粒を含み、灰白色を呈している。54は外面に格子目叩きを施し、内面はナデ調整、胎土はこまかく砂粒を含み、灰色を呈している。

55は坏あるいは鉢型土器の底部で、器厚が厚く、胎土はこまかく微砂粒を含み、灰白色を呈している。56は高台付坏の底部であるが、高台部分がなく底部のみである。胎土はこまかく微砂粒を含み、灰白色を呈している。

布痕土器（第10図57・58）

6点出土している。57・58は内面に薄く布目が残存する布痕土器の底部付近で、胎土はこまかく微砂粒を含み、赤橙色を呈している。

白 磁（第11図59）

10点程出土している。59は平形の小皿で、底部径4.2cm・口縁部径12.0cm・器高3.6cmを計る。底部から直線的に内湾しながら口縁部に至る。口唇部は丸い。

青 磁（第11図60~66）

10点程出土している。60~63は丸形の小皿で、高台を有している。60~62は大きく内湾しながら立ち上り口縁部に至り、口唇部は平坦である。60は波状口縁を呈し、底部径4.8cm・

口縁部径10.2cm・器高2.9cmを計り、明緑灰色を呈している。61は底部径4.8cm・口縁部径10.3cm・器高2.9cmを計り、灰白色を呈している。62は底部径6.0cm(推定)・口縁部径10.4cm(推定)・器高2.2cmを計り、明緑灰色を呈している。63は底部径3.9cm・口縁部径9.5cm・器高2.6を計り、明青灰色を呈している。64は腰張形の小碗で、高台から内湾しながら立ち上り口縁部に至る。底部径3.8cm・口縁部径8.3cm・器高5.0cm(推定)を計り、灰白色を呈している。65は猪口で、口縁部が外反している。底部径2.8cm・口縁部径6.4cm・器高3.7cmを計り、灰白色を呈している。66は瓶の口縁部で、頸部から内傾しながら立ち上り、さらに口縁部で外反し、口縁上部で直上している。

磁 器 (第11図67~72)

30点程出土しているが、ほとんどが碗である。68は内湾しながら口縁部に丸い浅半球形中碗の口縁部で、口唇部は丸く、にぶい黄色を呈している。69は内湾しながら立ち上り口縁上部で外反する端反形小碗の口縁部で、口唇部は丸く、灰白色を呈している。70は内湾しながら口縁部に至る浅半球形碗の口縁部で、口唇部は若干肥厚し丸く、灰白色を呈している。71は広東形の中碗で、高台から内湾しながら口縁部に至り、口唇部は丸い。底部径6.0cm・口縁部径10.6cm・器高5.7cmを計り、灰白色を呈している。72は中碗の底部で、底部径4.2cmを計り、緑灰色を呈している。

染 付 (第11図73~第12図86)

染付は全体の22%を占める300点が出上しているが、ほとんどが碗である。文様としては風景及び草花文等の他に直線や曲線を組合せて描いているものがありバラエティーに富んでいる。器形的には底部から内湾しながら口縁部に至る腰張形の小碗(74~81・83)が多いが、口縁上部で外反する端反形のもの(73)も含まれる。また、直線的に内湾しながら口縁部に至る広東形の中碗(82)、胴下部で屈折して立ち上る半筒形の小碗(84)、水平方向に大きく広く平形の小皿(85)、猪口(86)も出土している。

陶 器 (第12図87~第13図97)

陶器は全体の36%を占める500点が出土している。器形としては擂鉢及び壺型土器が多く、壺型土器・鉢型土器が含まれる。87は大型の擂鉢の口縁部で、器厚は厚く、口縁部外帯は三棱を呈し、にぶい橙色を呈している。88は小型をの擂鉢の口縁部で、器厚は薄く、口唇部は丸く、にぶい褐色を呈している。89は口縁断面がT字形に肥厚した大甕の口縁部で、器厚は厚く、暗褐色を呈している。90は口縁断面がT字形に肥厚し、頸部が「く」字状を呈した大甕の口縁部で、器厚は厚く、にぶい黄褐色を呈している。91は口縁部が「く」字状に外反し、口縁断面がT字形を呈した壺の口縁部で、器厚は厚く、灰黄褐色を呈している。92は

常滑系の大壺の口縁部で、口唇部は折返され丸みをもっている。器厚はわりと薄く、灰オリーブ色を呈している。93は腰張形の小鉢で、高台から内湾しながら立ち上り胴部中央部で外反しながら口縁部に至る。底部径 4.4 cm・口縁部径 11.2 cm（推定）・器高 4.4 cm を計り、黒色を呈している。94は胴部に段を有する浅丸形の小鉢で、0.8 cm・底部径 4.9 cm・口縁部径 12.8 cm（推定）・器高 4.4 cm を計り、灰白色を呈している。95～97は鉢の底部で、95は底部径 6.5 cm・灰黄色を呈し、96は底部径 4.5 cm・灰白色を呈し、97は底部径 5.7 cm・灰白色を呈している。

瓦（第13図98～第14図103）

瓦は全対象地域から出土しているが、時代幅が広く平安時代から近代及び現代のものまで出土しており、本報告ではその中でも古いと考察される5点を掲載した。98はC区から出土したもので、三巴の軒丸瓦である。99～102は凹面に布目を残す丸瓦でA区から、103は両面ナデ調整を有する平瓦である。これらの詳細については第13図及び第14図を参考にしていただきたい。

石 器（第15図104～106）

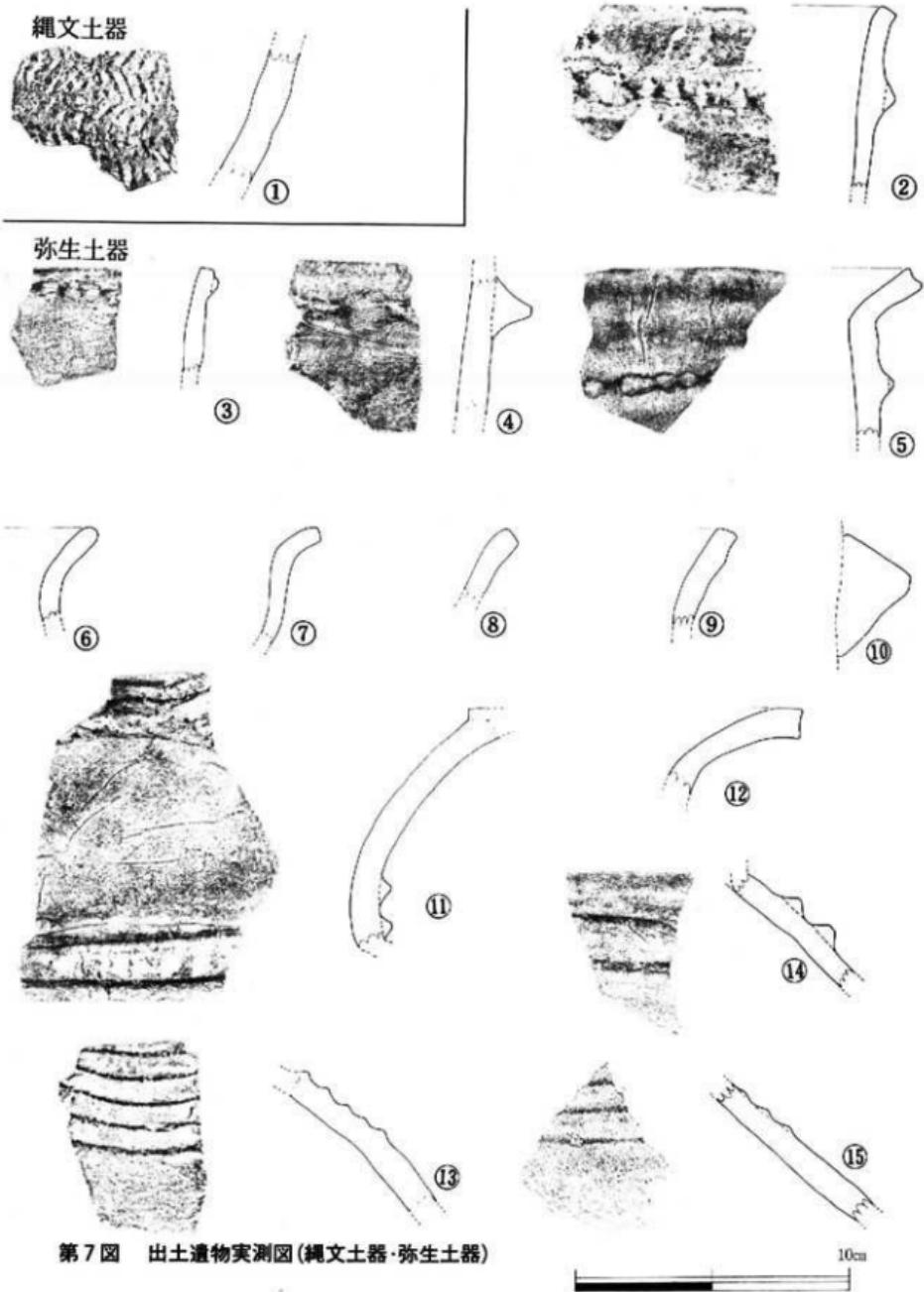
打製石斧2点及びすり石1点が出土している。104は頁岩製の打製石斧であるが、あらい調整で、自然面を残している。長さ 15.3 cm・厚さ 1.2 cm・最大幅 7.0 cm を計る。105は頁岩製の打製石斧であるが、刃部を欠損している。現在長 8.1 cm・厚さ 2.5 cm・幅 5.0 cm を計る。106は砂岩製のすり石で、長軸 8.6 cm・短軸 7.0 cm・厚さ 5.8 cm を計る。

註 陶器・磁器・染付等の器形・器種分類については『四谷三丁目遺跡』別冊一江戸遺跡検出のやきもの分類一（兼凡例）1991年9月を参考にして分類を行った。

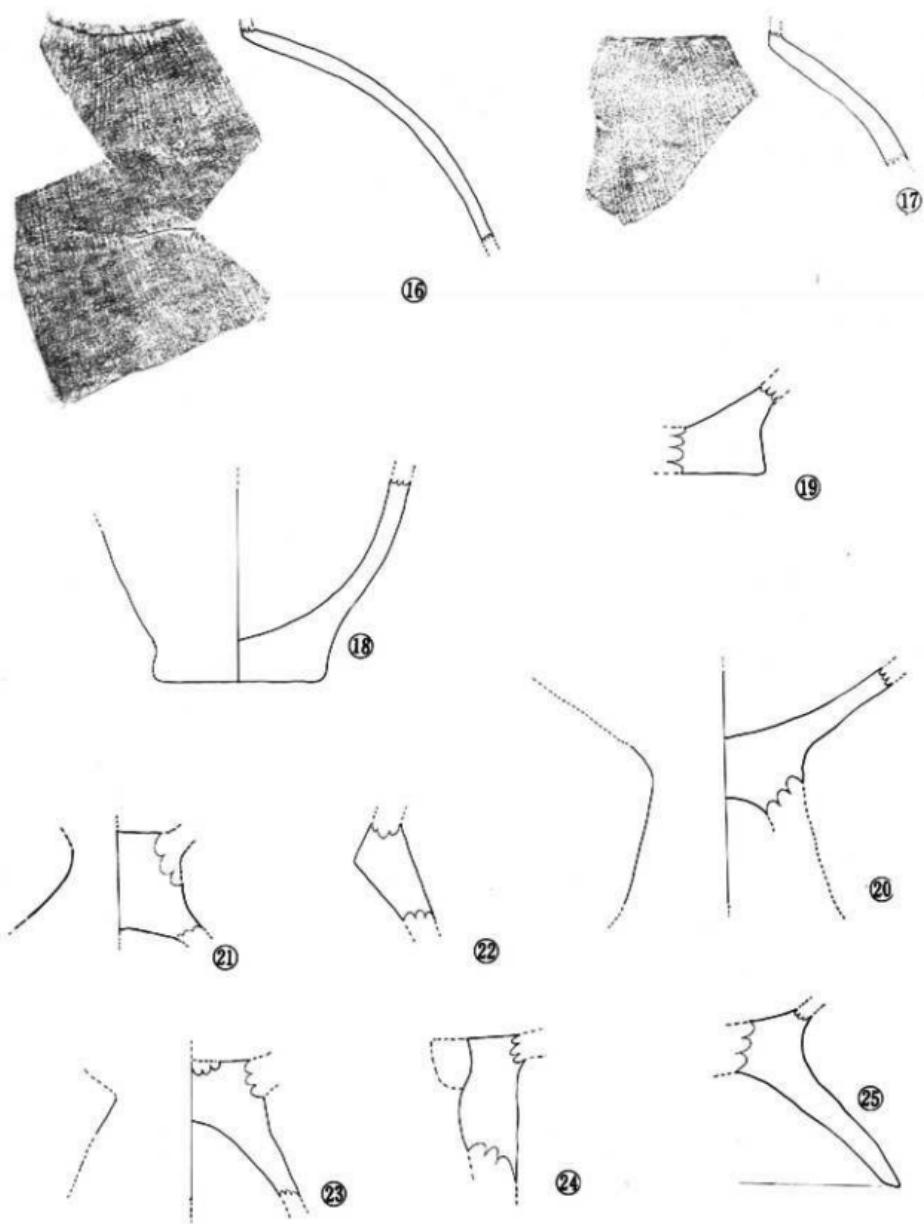
表2 土器観察表

図面番号	遺物番号	基部	部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第8図	20	高坏	脚部	ヘラ磨き	ヘラ磨き	"	にぶい橙色 5 YR6/4	褐色 5 YR6/6	2mm前後の 砂粒を含む	A区
"	21	"	脚部	朱塗り ヘラ磨き	"	"	明赤褐色 2.5 YR5/6	黒褐色 2.5 YR3/1	"	B区-2
"	22	"	"	ヘラ磨き	"	"	にぶい褐色 2.5 YR5/4	浅黄褐色 7.5 YR8/4	"	B区-3
"	23	"	"	ナデ	ナデ	"	にぶい褐色 7.5 YR7/4	にぶい褐色 7.5 YR7/4	"	A区
"	24	"	"	ヘラ磨き	"	"	灰黄色 2.5 YR7/2	淡黄色 2.5 YR8/3	"	C区
"	25	"	"	"	ヨコナデ	"	にぶい褐色 7.5 YR7/3	にぶい褐色 10 YR7/3	4mm前後の 砂粒を含む 白雲母混入	B区-3
第9図	26	壺	口縁部	ヨコナデ	"	"	浅黄褐色 10 YR8/3	10 YR7/2	4mm前後の 砂粒を含む	B区-2 口縁部尖りぎみ
"	27	"	"	"	"	"	浅黄褐色 10 YR8/3	にぶい黃褐色 10 YR7/3	3mm前後の 砂粒を含む	B区-2 口縁部丸い
"	28	"	"	"	"	"	浅黄褐色 7.5 YR8/6	浅黄褐色 7.5 YR8/6	2mm前後の 砂粒を含む	C区 口縁部外反
"	29	壺	"	"	"	"	浅黄褐色 7.5 YR8/4	浅黄褐色 7.5 YR8/4	4mm前後の 砂粒を含む	B区-1 口縁部平坦
"	30	壺	頸部	"	"	"	にぶい褐色 7.5 YR6/4	にぶい褐色 7.5 YR6/3	"	" 頸部から外反
"	31	金	脚部	半月状の突帯	"	"	浅黄褐色 10 YR8/3	にぶい黃褐色 10 YR6/3	"	"
"	32	"	底部	格子目叩き	"	"	にぶい褐色 7.5 YR7/3	にぶい褐色 7.5 YR7/3	"	丸底
"	33	壺	"	タテナデ	"	"	褐色 5 YR7/6	褐色 7.5 YR7/6	"	A区 平底
"	34	"	"	"	"	"	浅黄褐色 7.5 YR8/4	褐色 7.5 YR6/1	"	B区-3 平底
"	35	コップ型	"	ナデ	ナデ	"	浅黄褐色 7.5 YR8/4	浅黄褐色 7.5 YR8/4	3mm前後の 砂粒を含む	A区 平底
"	36	壺	"	ヨコナデ	ヨコナデ	"	灰白色 10 YR8/2	浅黄褐色 7.5 YR8/3	4mm前後の 砂粒を含む	B区-3 丸底
"	37	坏	口縁部	"	"	"	浅黄褐色 7.5 YR8/3	褐色 7.5 YR7/6	2mm前後の 砂粒を含む	ヘラ切り底
"	38	"	"	"	"	"	褐色 5 YR7/8	褐色 5 YR7/8	"	"
"	39	"	"	"	"	"	浅黄褐色 7.5 YR8/4	浅黄褐色 7.5 YR8/6	"	B区-2
"	40	"	"	"	"	"	にぶい褐色 5 YR7/4	にぶい褐色 5 YR7/4	"	C区
"	41	"	"	"	"	"	浅黄褐色 10 YR8/3	浅黄褐色 10 YR8/4	"	"

同面 番号	遺物 番号	器種	部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第9図	42	坏	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	"	浅黄褐色 10YR8/4	にぶい褐色 7.5YR	2mm前後の 砂粒を含む	B区-2 ヘラ切り底
"	43	"	底部	"	"	"	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR7/3	"	"
第10図	44	"	"	"	"	"	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	"	C区 "
"	45	"	"	"	"	"	浅黄褐色 7.5YR8/6	浅黄褐色 7.5YR8/6	"	B区-1 "
"	46	"	"	"	"	"	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	"	ヘラ切り底
"	47	"	"	"	"	"	褐色 5YR7/6	浅黄褐色 7.5YR8/6	"	C区 ヘラ切り底
"	48	"	"	"	"	"	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 10YR7/2	"	"
"	49	"	"	"	"	"	にぶい褐色 7.5YR7/4	浅黄褐色 7.5YR8/4	"	"
"	50	"	"	"	"	"	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 7.5YR8/3	"	B区-2 高台付坏

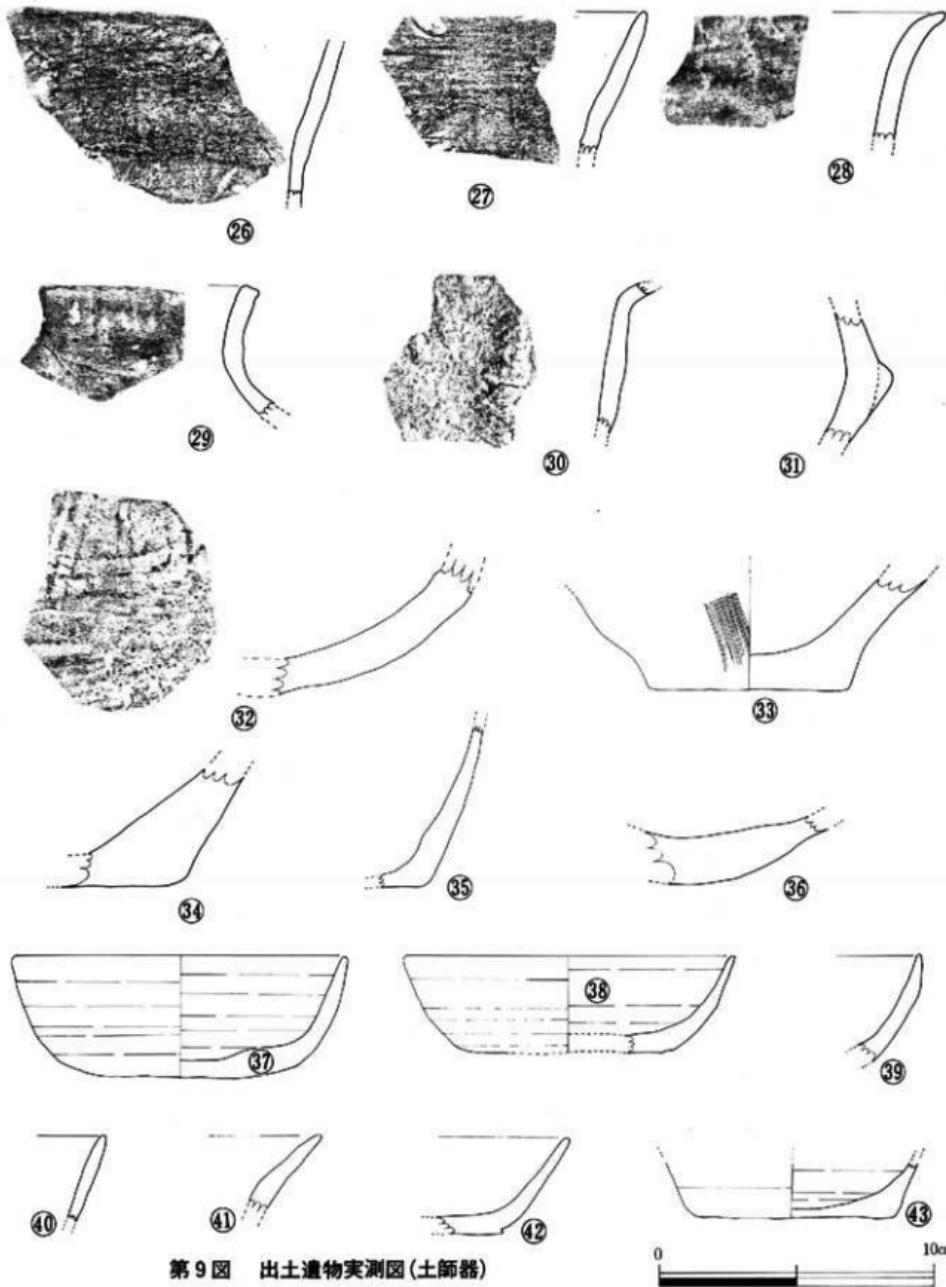


第7図 出土遺物実測図(縄文土器・弥生土器)

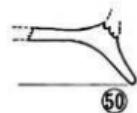
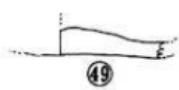
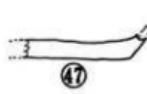
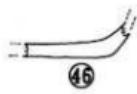
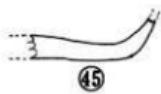
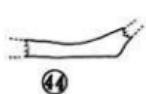


第8図 出土遺物実測図(弥生土器・土師器)

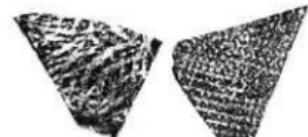
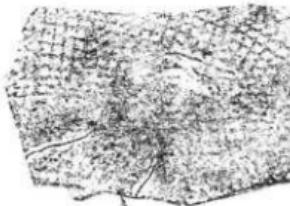
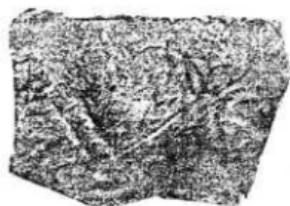
0 10cm



第9図 出土遺物実測図(土器)



須 惠 器



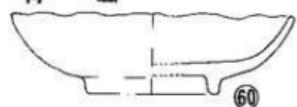
第10図 出土遺物実測図(土師器・須恵器)

白 磁

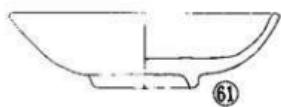


59

青 磁



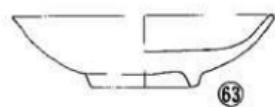
60



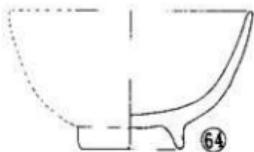
61



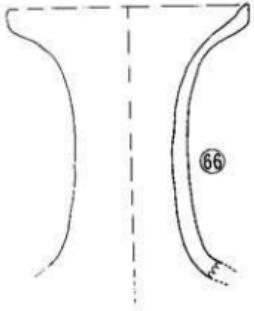
62



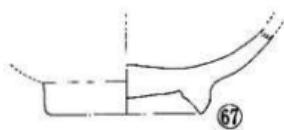
63



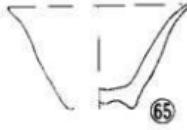
64



65

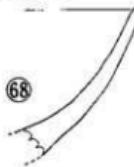


66



67

陶 磁 器



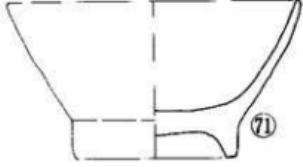
68



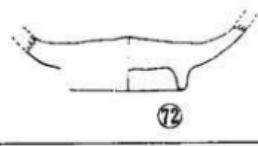
69



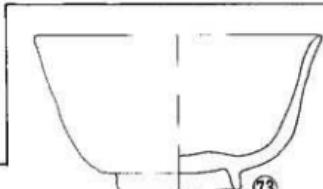
70



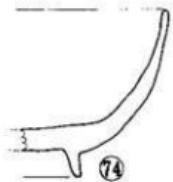
71



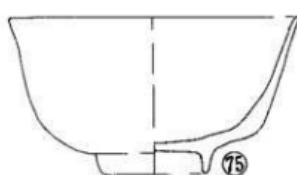
72



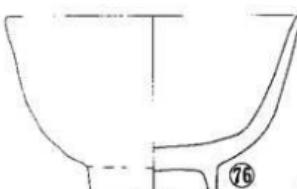
73



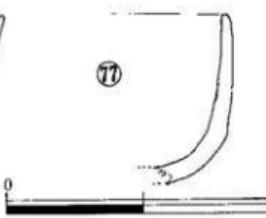
74



75



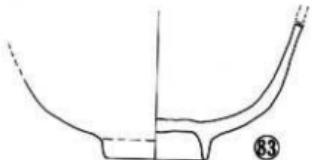
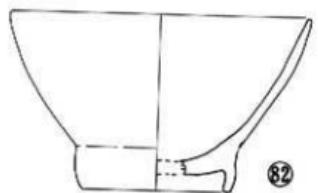
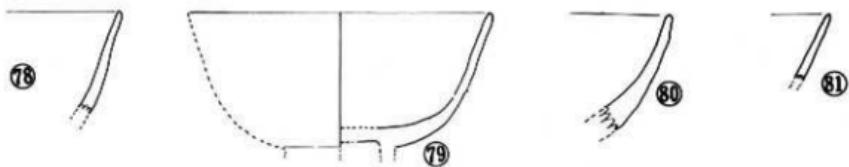
76



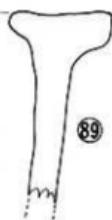
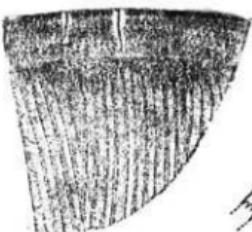
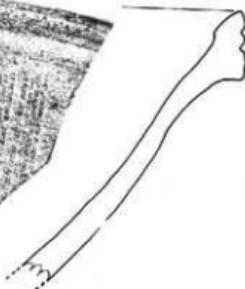
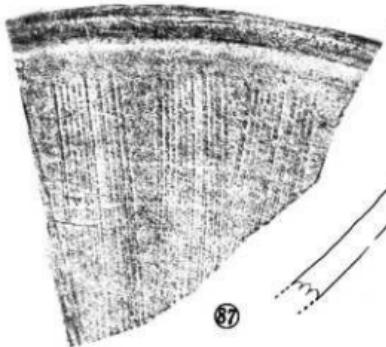
77



第11図 出土遺物実測図(白磁・青磁・磁器・染付)

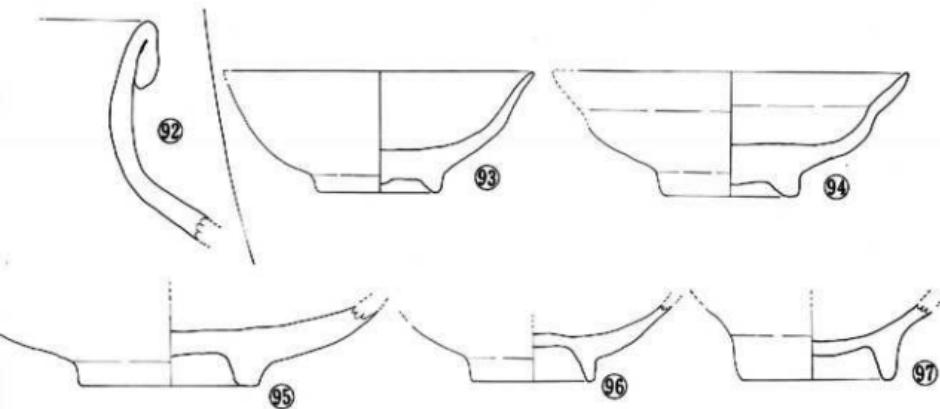


陶 器

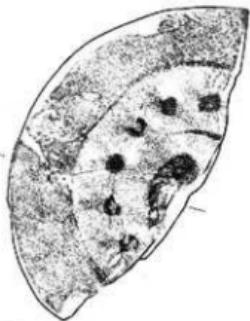


第12図 出土遺物実測図(染付・陶器)





瓦



98

98 軒丸瓦
瓦当部 なし
外区 外縁幅 2.1cm
厚さ 1.8cm
内区 径(推定) 9.0cm
色調 灰白色(Hue 7.5 Y 7/1)
胎上 砂粒を含む

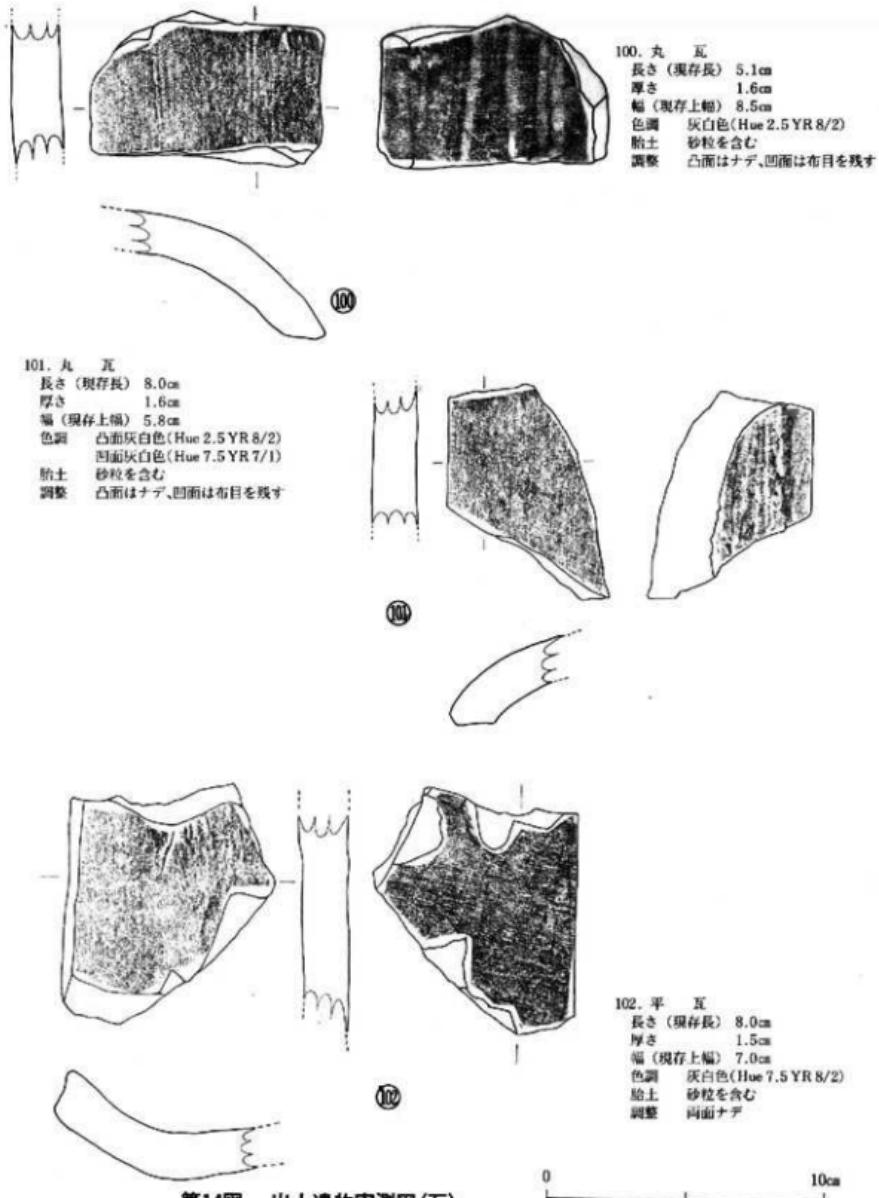


99. 丸直
長さ(現存長) 6.8cm
厚さ 1.7cm
幅(現存上幅) 9.5cm
色調 凸面灰白色(Hue 7.5 YR8/1)
凹面褐灰色(Hue10 YR4/1)
胎土 砂粒を含む
調査 凸面はナデ、凹面は布目を残す

99

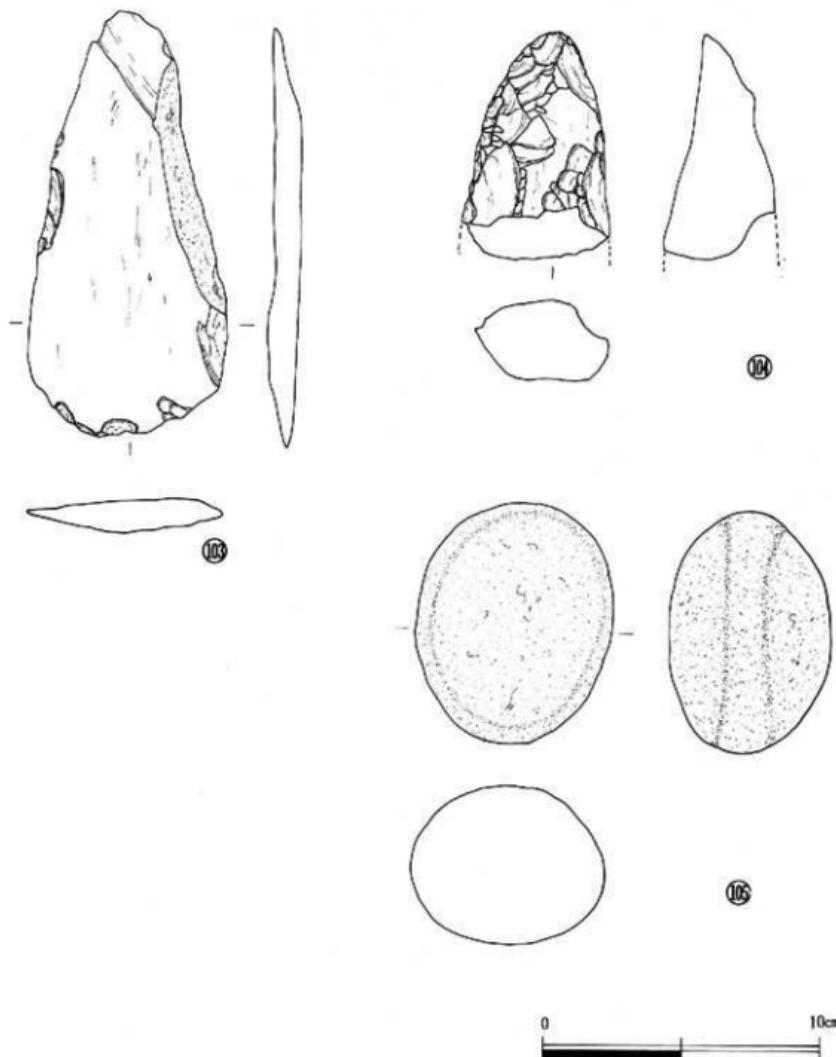


第13図 出土遺物実測図(陶器・瓦)



第14図 出土遺物実測図(瓦)





第15図 出土遺物実測図(石器)

V. ま　と　め

日 高 正 晴

このたび、独立丘陵をなしている平郡高三納集落における、道路拡幅工事の事前発掘調査において、各時期にみられるかなりの出土土器類が確認された。

それで、これらの土器類について考察を加えてみたのであるが、大部分の出土品は、この集落の南北約140m、東西約100mの平坦な畠地の耕作に伴って出土した土器類を、その間に集め石塚として残してあったものが、その後、土坑内に投入された。そして、それらの投入物の中から、今回の発掘調査において、各種の土器類が掘り上げられ、しかも、この土坑に伴う出土物の層位は、大方、かく乱されていたが、その下の硬質土層にみられた溝状遺構においては、弥生土器を確認することができた。

それで、以下、このたびの発掘調査において、石塚からの投入土器類と層位的に認められた弥生土器類について述べ、さらにこの高三納の独立丘陵台地が歴史的にどのように考察できるかということについても論述してみたいと思う。

まず、この集落の中央部にあたるトレンチB区-1の地点に確認された4号ならびに5号の溝状遺構の内部から、2條の突帯を有し鋸先状口縁部をもつ壺形土器片などが出土し、さらに突帯文を有する下城系壺形土器片も発見されたので、この遺構は弥生中期末乗ごろから後期の初頭にかけての時期に推定できる。

さらに、弥生後期にみられる刷毛目土器なども、かなり散見できたが、さらにこの遺構からは粒子入りで在地性の強い古式土師器片もかなり認められた。

しかし、今回の出土遺物の中には、その後の古墳時代に伴う土器類は、ほとんど認めることができず、土坑内からの出土土器類は、大部分、奈良時代から平安期さらに、中世にかけての遺物、それに近世の陶磁類であった。

そして、この高三納遺跡に対して、われわれが注目すべきことは、このトレンチB区-1の6号および7号の溝状遺構から奈良時代を中心とした律令時代の出土遺物がかなり確認できたことである。その中でも奈良時代に推定される布目瓦片が数点発見され、さらにわずかしか出土しなかった須恵器も、そのころの時期にあてることができるのであるが、また、出土の土師器も奈良時代ごろから平安期にかけての年代のものが認められた。それに、興味深かったことは、律令期に伴う布痕土器も少々ではあるが確認できたことである。

それから、さらに下って中世期に入ると、A区の1号、2号ならびにC区の8号などの各溝状遺構内から白磁、青磁、それに陶器類などの遺物が出土したが、それらの中には、近世

になってからの染付磁器も認められた。なお、出土した土師器の中には、あるいは、中世期にかけての土器も混入していると考えられる。

さて、この高三納遺跡の所在する丘陵台地は、標高50数メートルあり、周辺の田畠からの比高も約40mはあると思われるが、そのすぐ東側には一つ瀬川の支流である三納川が北の方へ流れしており、そのような地形的状況から考えられることは、古い時代に何らかの防衛的意味ももった本拠が定められた地域であったのではなかろうかということである。それで、この平坦な台地の縁辺部周辺を踏査してみたところ、その丘陵地西側の急峻な傾斜面をあがり詰めた縁辺部に約50mにわたり、高さ約2m～1mの土壘状遺構と推定される土盛りを確認することができた。

なお、この丘陵台地の周辺すべてを調べたが、周囲は東西および南側すべて急な傾斜をしており、防衛的役割は十分に果されると思われたが、さらに、北側には、一部、空掘と推測されるような掘削も認められた。このように考察してみると、私見として想定されるのは、「館跡」などのような遺跡の存在である。

しかし、このたびの調査が、ただ道路沿いのトレンチによる確認調査によっての出土品を主体にするものであったので、館跡などのことについては明かにすることはできないが、この高三納遺跡を中心とした平坦な丘陵地に対しては、どうしても、伊東氏の都於郡入城以前に在地氏族の拠点がおかれた所かもしれないと思われる。

ところで、建久8年（1197年）に作成された日向国図田帳によると、前斎院御領さきのさいいんであった平郡庄100町は地頭預所右馬助殿廣時という人が統轄していたようであるが、その中心的な本村は、この高三納丘陵地から低地を挟んで、すぐ南側500mぐらいの丘陵地上に所在している。

また、この地域は三納古墳群内の平郡古墳集団の地域でもあり、それに、この高三納遺跡には、奈良時代から平安期にかけての遺物も、かなり出土しているので、律令時代に何らかの遺構が存在した可能性もある。

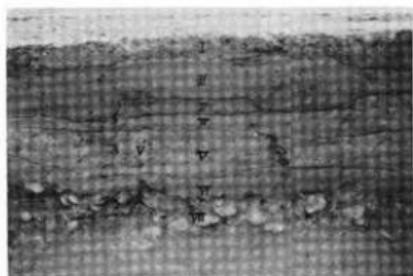
特に、現在高三納集落に通っている道路が、方位的に全くの南北路線であること、そしてその道路から以西には今日でも民家が存在しないことなど、さらに里人の言で、古く寺院址もあったということなどを考慮すると、律令期から中世莊園時代にかけての遺構の存在が浮上してくる。

図 版

図版 1

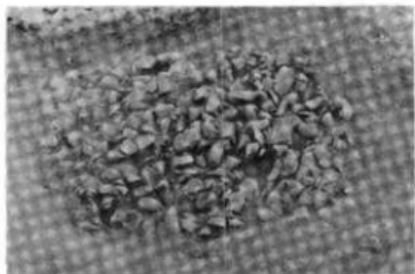


高三納遺跡遠景

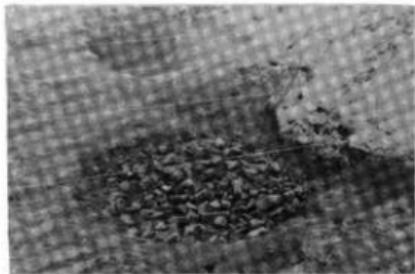


調査地土層（A区）

- I 表土（耕作土）
- II 黒褐色土（擾乱）
- III～暗褐色土
- IV～黒褐色ローム
- V～褐色ローム
- V'～褐色土
- VI～赤褐色ローム
- VII～ジャリ混り礫層

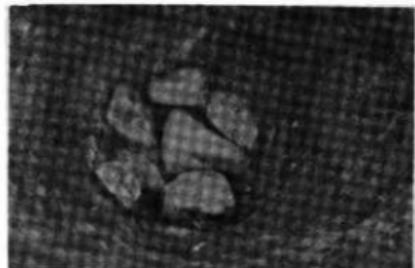


A区 1号集石遺構検出状況①

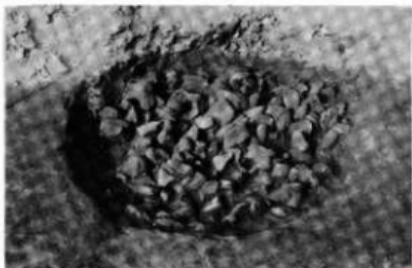


A区 1号集石遺構検出状況②

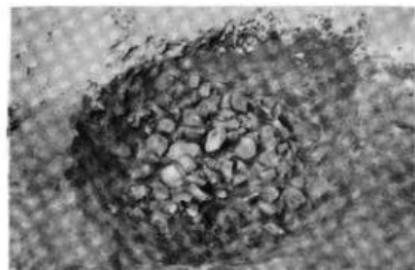
図版 2



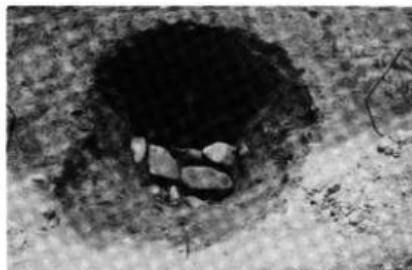
A区 1号集石遺構底面検出状況



C区 2号集石遺構検出状況



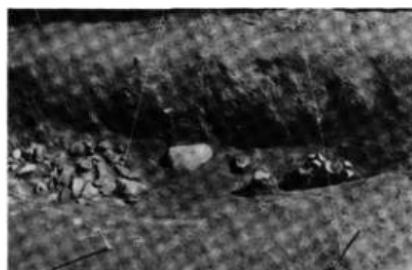
C区 2号集石遺構検出状況②



C区 2号集石遺構底面検出状況



A区 溝状の土坑検出状況①



A区 溝状の土坑検出状況②

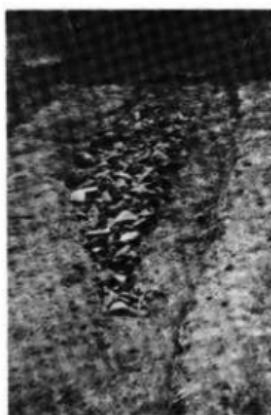
図版 3



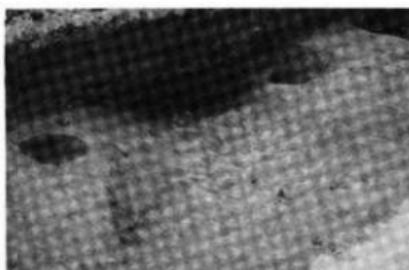
A区 1号溝状遺構検出状況



A区 2号溝状遺構検出状況



A区 配石状遺構検出状況



B区-2 6号溝状遺構及び柱穴検出状況

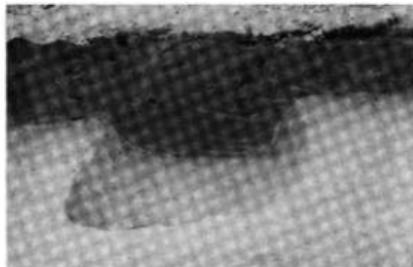


B区-2 7号溝状遺構検出状況

図版 4



C区 8号溝状遺構検出状況



B区-2 1号方形土坑検出状況



B区-3 3号円形土坑上面検出状況

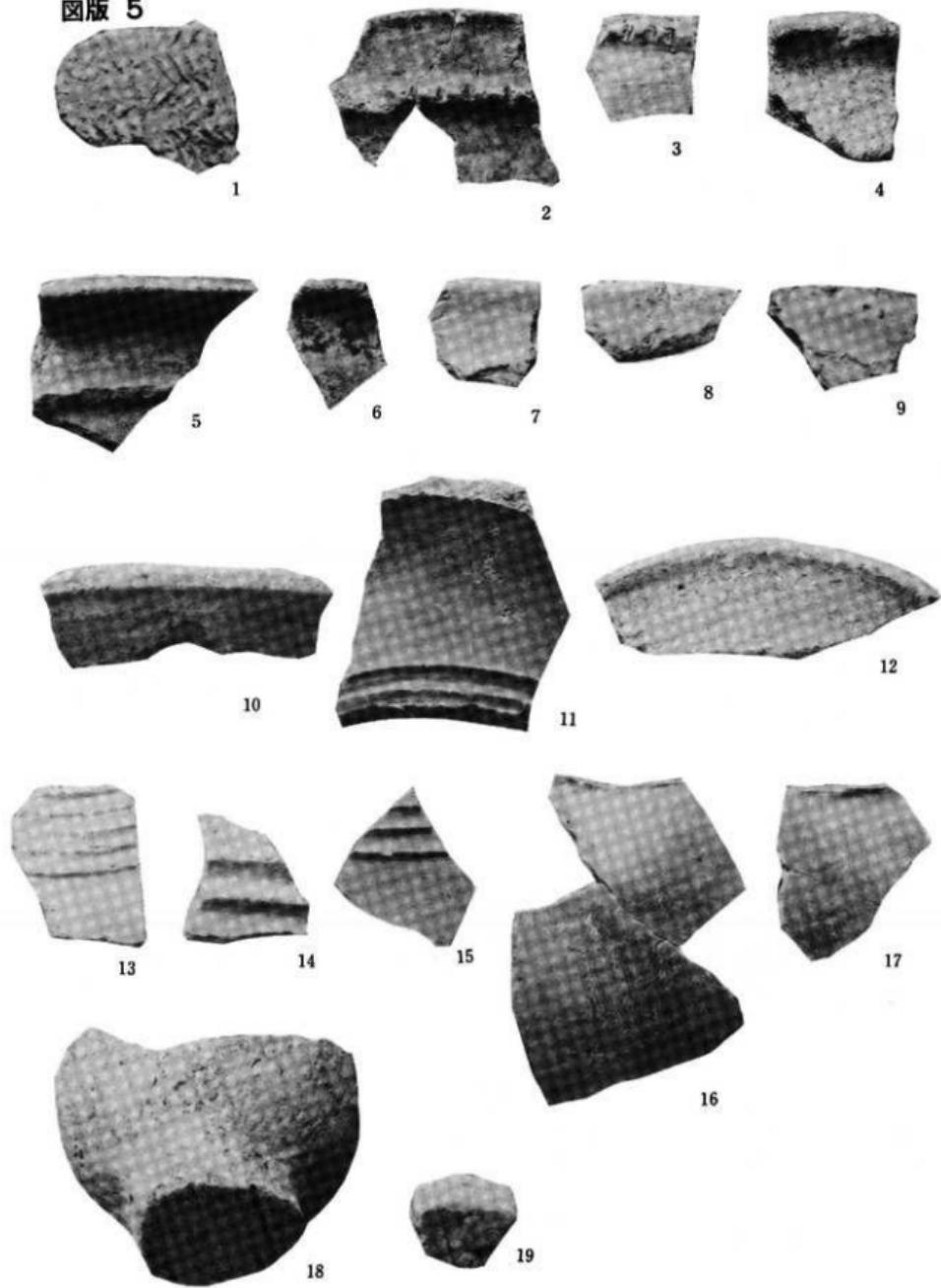


B区-1 柱穴及び溝状遺構
検出状況

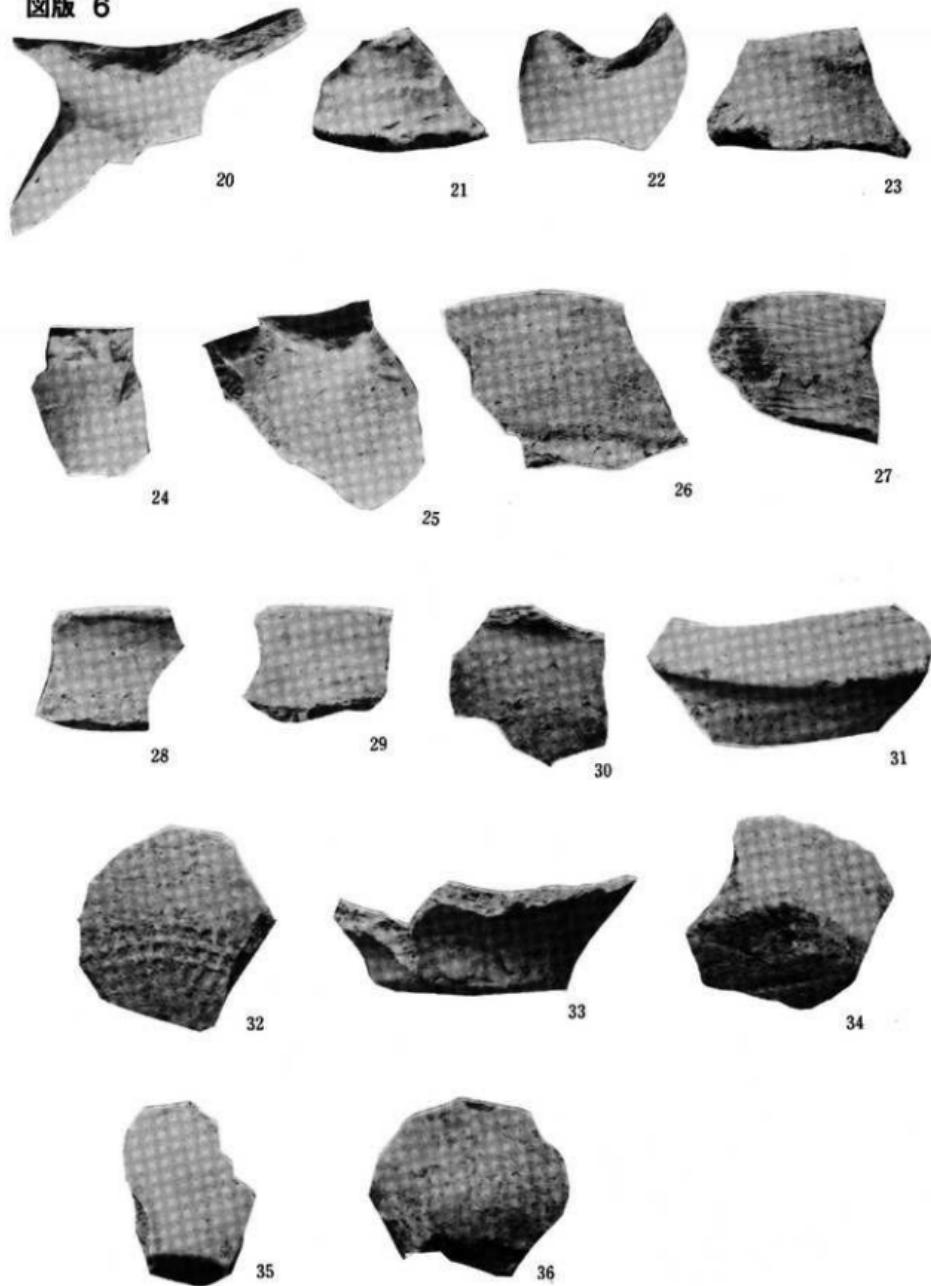


C区 軒丸瓦出土状況

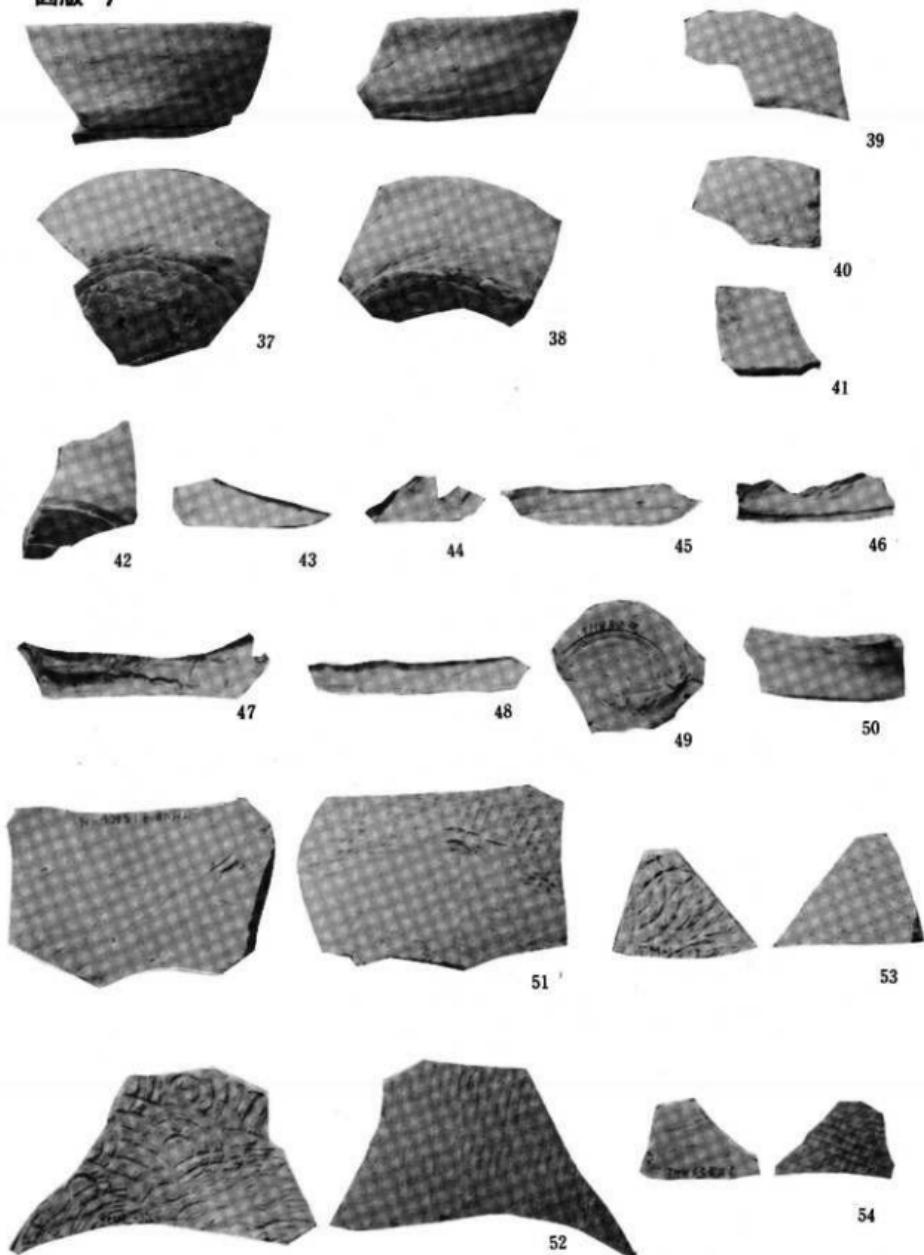
図版 5



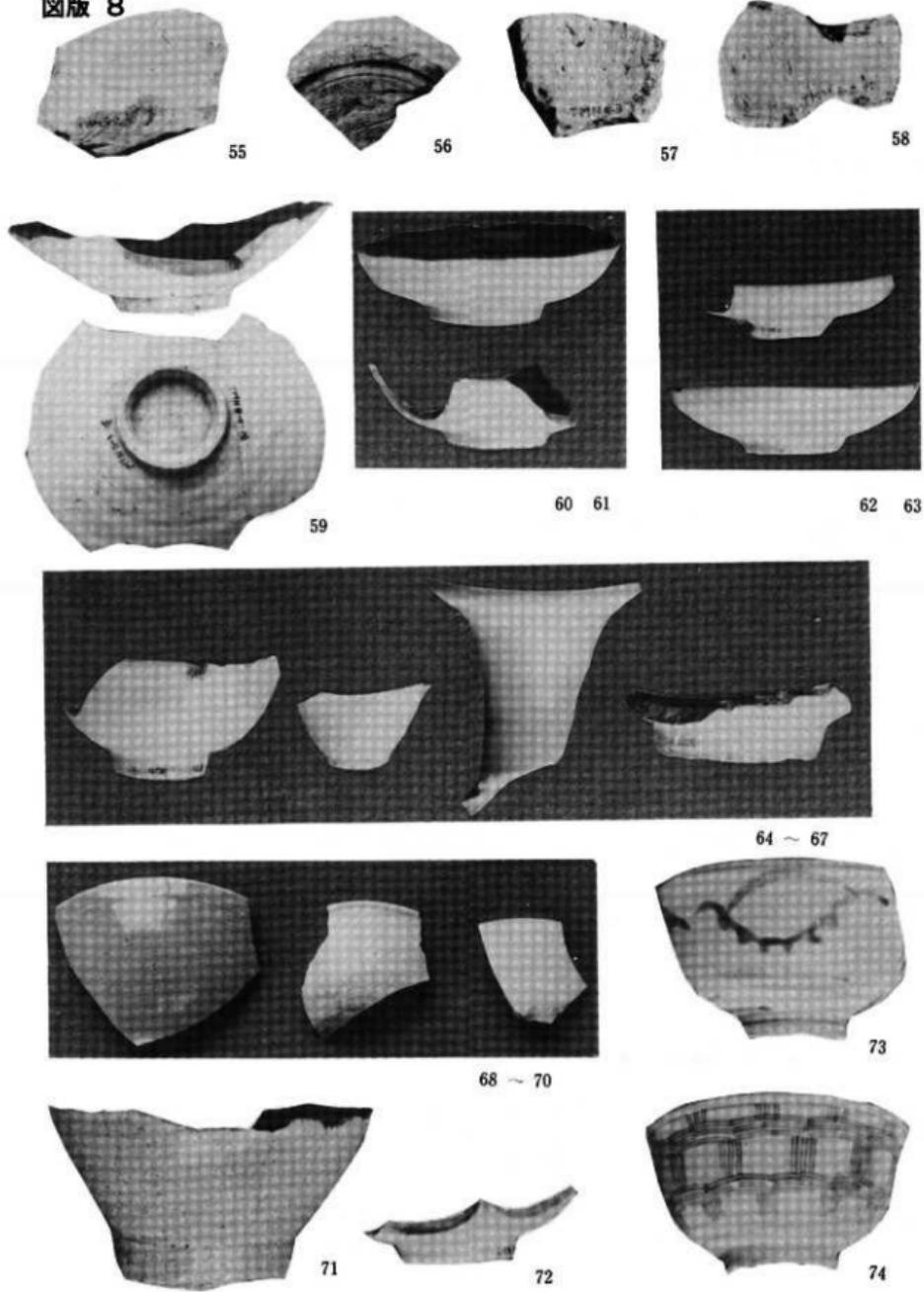
図版 6



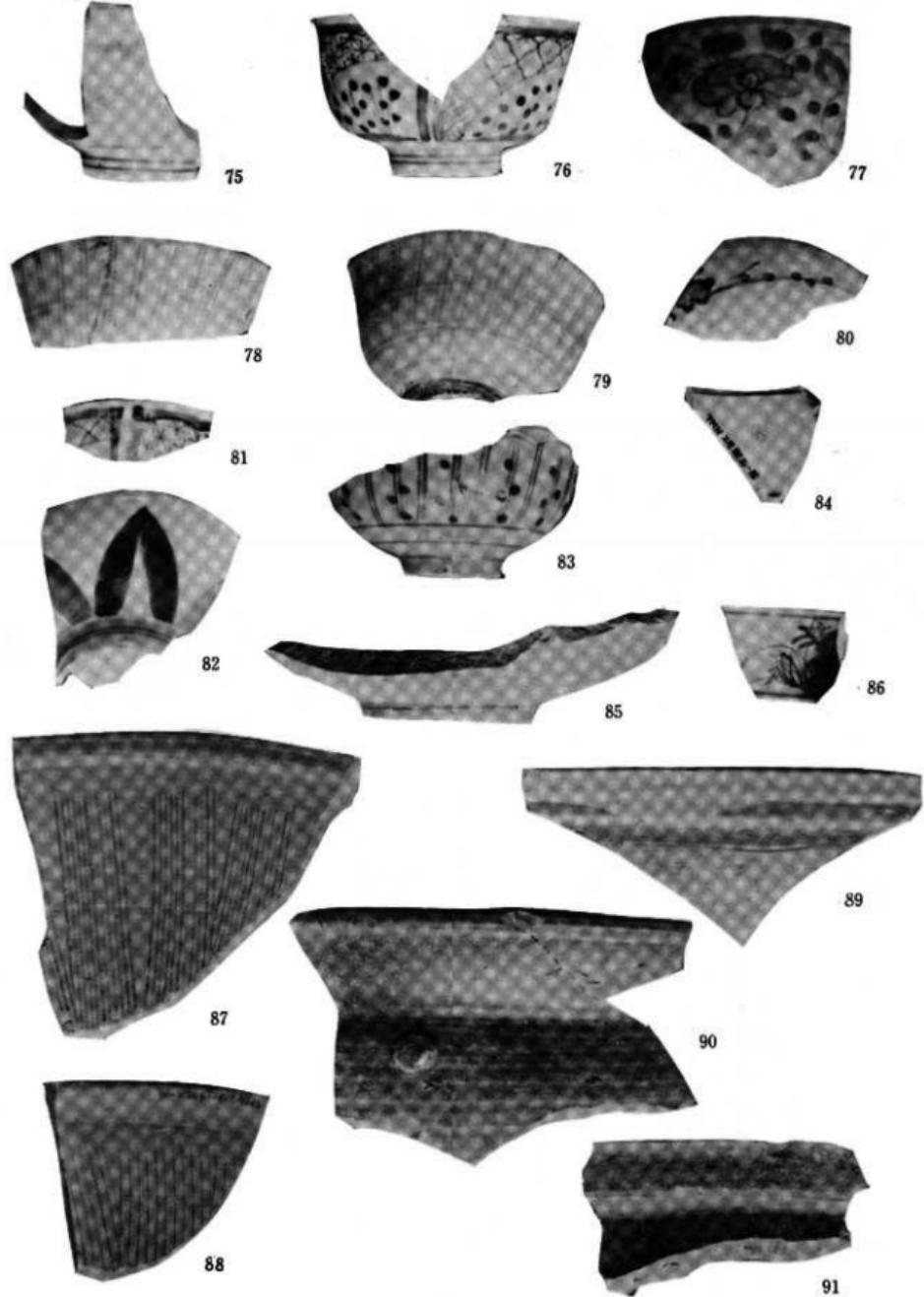
図版 7



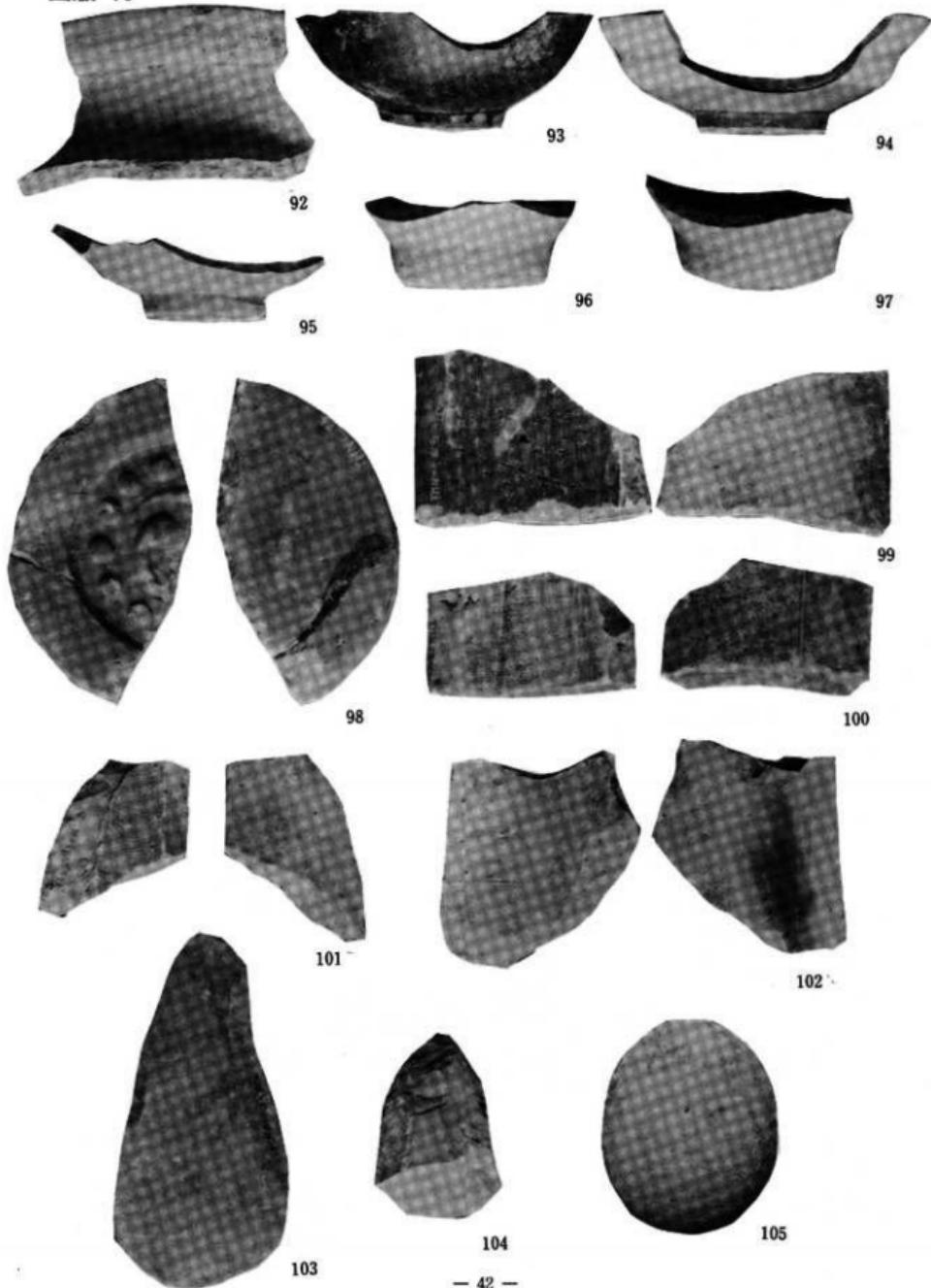
図版 8



図版 9



図版 10



西都市 埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集

発行年月日 平成4年3月31日

編 集 西都原古墳研究所

発 行 西都市教育委員会

印 刷 ふくしげ印刷

